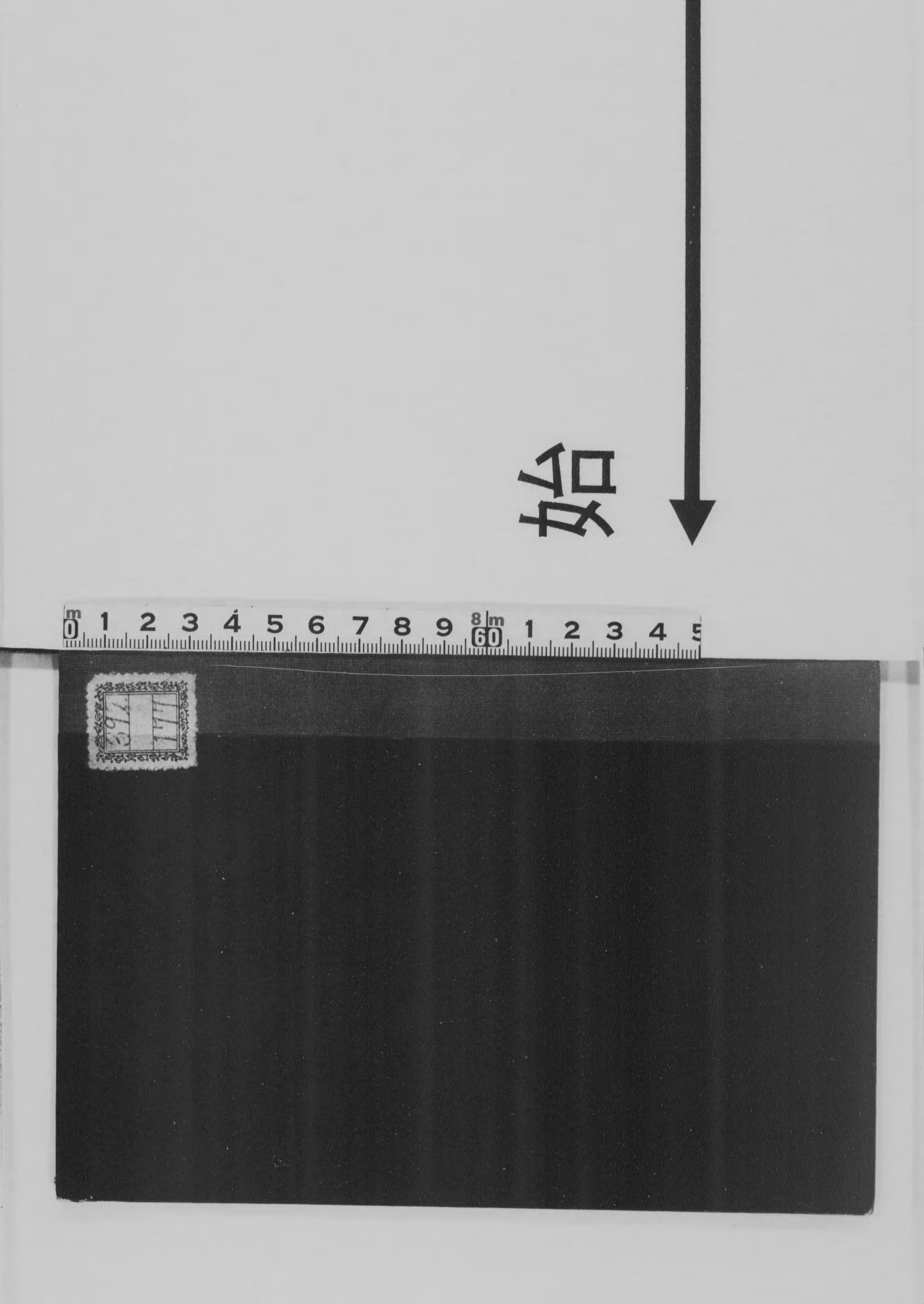

392-177

マクス、ミユラー

# 宗教學綱要

大正
10 3.14
内交

# はしがき

一、マクス、ミュラー博士、宗教に關する自家の研讃の結果を、千八百七十年の二月より三月にかけて、ローヤル、インスチチゥションに於て講演すること前後四回。後之を編輯し、別に參考資料として、同主題に關する小品的評論數種を集めて附錄とし合せて以て一卷となしぬ。題して Introduction to the Science of Religion といふ。是即ち本書の原本なり。可なり多頁の册子なるも、本文は短くして附錄は比較的に尨大なりとす。

二、本書、署して抄譯と稱すれとも、本文は大抵之を譯

出し、唯さまで肝要ならずと覺えられたる若干の節節を逸したるのみ。但し附錄に至りては、其の內最も注目すべく最も價値ありと見えたる者二個をのみ摘譯するに止めたり。是れ此譯書の容積が原本の夫に比して頗る小なる所以なり。而かも決して原著のほんの大意を略述したる底の者にあらず。見ん人、外形の大差を見て直ちに內容を憶斷するなくんは幸甚。

三、

講演に附せられたるものながら、氏が自家の筆になり、其特得の莊重典雅なる文致は斯學の叙述に最もよく適合し、不可言の妙趣は到所に溢る。然るに今や這の錦繡を徒らに剪裁して繿縷となす。罪免るゝに所なし。叩頭以て、天上の翁の靈に向つて謝するを禁ずる能はず。

四、

本書を通讀する者の容易に見ん如く、氏が斯學上の見解の先哲未言と覺ほしき著しきもの二あり。曰く宗教の起原は「言語の疾病」にありとすると。曰く宗教は無限を感知する特殊の心機能なりと定義せると。是なり。其思想の卓拔なる丈に、非難を容るゝの地なきにあらで、從て、學者間の定評一にあらず。譯者の胸中又云ふべきもの少からずと雖此處其塲所にあらす今は其役に居らざるを以て唯默して已むのみ、但し、已にヴント氏も嘗て言及せし如く、氏の立脚地がスペンサー氏等の唯物的宗

教說と全然相異なれるにも拘はらず、共に宗教の起原を言語の不完全に歸する點に於て相一致せるは、偶然と云はゞ云へ、頗る奇として注目するに足るべし。(此事に關しては卷末の附錄を參照せよ)

五、氏の說は殆んと凡て言語上の證明に成る。是れ言語學者としての氏に取りて固より其所、從つて他者の模倣を許さゞる所、價値の最も多く存する所にして只管感服の外なしと雖、人若し、眞理は凡て唯言語の歷史よりのみ說明し得らるゝ者の如く思はゞ大なる誤なるべし。言語的論證は凡ての論證中の一方面たるには相違なし、凡てには非ず。

譯者識

# 目次


## 第一講……一

宗教學に反對の二說―宗教は神聖なり―セン氏の宣言書―阿育王の刻文―寬容的精神―僞善と迷信―比較研究―比較の利益―ゲーテのパラドックス―宗教の二義―史的宗教―心的能力としての宗教―感性及理性と竝立す―人の人たる所以―カントの說―比較神學と理論的神學―比較研究の資料―アクバー大帝―本文批評の學―モハメットの奇蹟―佛教―聖典は必ず其原語に於て讀まざるべからず―佛陀の奇蹟―バラモン教―波斯教―ルドー古代語は今世語と同一視すべからず―古傳說の眞意を解するには其語の特質に通ぜざるべからず―ブリーク博士の言―有性語と無性語―ズル語の「葦」―希臘人の祖先―言語は皮殼なり―之を破りて眞義を露現せしむるに何の不可か之あらん―希臘の諸神―天父の像―

# 欠




第二講……三四

宗教的典籍の豐富―セム族及アールヤ族に於ける典籍宗教―並行的二流脈―支那の宗教丈けは例外―波羅門教の書類、革陀及其他―シク教―佛典―闍伊那教―波斯教の書類、ゼンダエスタ―支那の佛典―二流脈外の宗教研究の材料―阿弗利加―埃及―野蠻人―南洋諸島―南北亞米利加―此汗牛充棟を如何せん―分類あるのみ―種々の分類法―眞宗教と僞宗教―天啓宗教と自然宗教―各教自らを天啓とする傾あり―自然宗教の意義―要するに採るに足らず―國民的宗教と個人的宗教―何れの開祖も自ら其創始者たるを認めず―多神教、二神教、一神教、―單一神教及無神教の二目を置くの要あり―然らば如何なる分類法を採用すべきか―

第三講……五三

國民、言語、宗教、三者の關係―國民を作る所以のものは何ぞや―政府にあらず―血肉にあらず―宗教と言語とにあり―而も宗教を重しとす―シエリングの說

# 宗教學綱要

マクス、ミユラー

## 第一講

（千八百七十年二月十九日、ロイヤルインスチチウションに於て）

抑も宗教學とは宗教を研究する學である。然るに宗教の科學的研究を不可なりとする說がある。二種ある。甲は云ふ、凡そ宗教は神聖にして犯すべからざるものである。之を如何ぞ動物や物質と等し並に、研究の對象物として取扱ふとは怪しからんと。乙の說には曰く、宗教はもともと煉金術や星占法と同班に列すべき物て、つまり人間の迷想妄見の產物に過ぎないからとても科學者の注意を價する譯にはいかぬと。此二說は其理由とする所が丁度相反對して居る。一つは宗教は神聖だから手を觸れるのは勿躰ないと云つて、擔ぎ擧けるし、他は賤しい下等なも



京都帝國大學圖書之印

欠

のだから手を附けるが物はない輕蔑する。吾人は此の相反せる二說共に或意味に於て認容するのである。但し其結論は全然之を排斥するのは勿論である。さて、なるほど甲說の云ふ如く宗教なる者は——其最完全な者にせよ、ばた最不完全なる者にせよ——必ず神聖な者に相違ない、吾人に向つて最高の尊重を請求する權利はあるざればこそ、印度の Keshub Chunder Sen（ケシャブ・チャンダー・セン）と云ふ人が立てた Brahman samaj（ブラーマン・サマージ）教會の「主義の宣言」書中に左の如き个條がある。曰く人ノ拜崇シタル若シクハ拜崇セントスル對象物ハソガ如何ナル宗派ニ屬セントモ之ヲ嘲笑シ或ハ非難スベカラズと、又曰ク如何ナル書典ヲモ神ノ無過誤ノ言語ナリトハ認定スヘカラス、然レトモ其宗派カシカク或書典ヲ認定シタル以上之ヲ嘲笑シ若シクハ非難スベカラズト又曰ク如何ナル宗派ヲモ賤シメ笑ヒ若シクハ惡ムベカラズ

と。ある。何れも尤もな言である。が、人或はがくの如き寬容的精神は印



度人固有のものでなく全く、かのセンか但しは、教會長の Rammohun Roy（ラムモフン・ロイ）かゞ基督教に摸倣したのであらうと邪推を逞ふするやも知れぬが、そうは云へん。見よ。之と正に同一の主義は同地に於て已に二千年以上の其昔に宣言せられて居ることを。之をなしたのは Asoka（アソカ）（阿育王、紀元前二五九—二二二）其人である。彼が造つて置いた紀念碑は近頃發堀されたが其刻文を讀めば何人も之を疑ふ事は出來ない。（E. Lenart 著 "Les Inscription de Piadasi" 一八八一年、七版、一七四頁、十二版二四九頁參照）其刻文の一つに曰く

「ピヤタシ王は、諸宗皆、何處に於ても（相侵すとなく）住在せんとを願ふ、彼等は何れも（肉欲の）控制と靈魂の淨拂とを嘉みするものなればなり。」

と又曰く「王は一切の宗派、僧侶、及戶主を恭敬す。王は寬大と諸種の愛顧とによつて彼等を恭敬す。……然るに玆に各宗の必ず奉ずべき根本律

あり。言語の節制是なり。他宗を貶して以て自宗を揚げんとすべからず、彼等を輕蔑すべからず、他宗に對しては常に相當の恭敬を與へざるべからず、かくの如くなすは是れ自宗を揚げ兼ねて他を益する所以なり。若し之に背かば却りて自宗を損するのみならず、他を益するなけん。抑も自宗を揚げ他を貶する者は畢竟自宗を顯揚せんとする篤信の心より出づるなるべきもかくの如きは適自宗を害するに止まらん。此故に唯平和を是宜しとなす。されば他の言說は喜で聽聞せざるべからずと雖も宗教學の研究者は之等の印度人に負けてはならぬ。公平無私の態度を取らんければならぬがさて、如何に尊き者なればとて、夫れを只敬して遠けて置いて、手を觸れるなと揚言するのは眞に尊敬の道に協つたものではあるまい。否寧ろ、よしや如何に神聖なるものにせよ、恐ることなく、偏することなく、親愛と忠實とを以て、自由なる眞摯なる研究をなして以て眞理の爲めに盡す事に於て眞の尊敬は存して居るのである。

次に乙說の云ふ所も決して嘘ではない。否宗教は其過古に於て賤劣なりしのみならず、現在に於ても、吾人は厭忌すべき許多のものゝ行はれてゐるのを認むるに躊躇しないのである。咒物崇拜（フエチシズム）と相去る遠からざる迷信、否尙之よりも惡しきもの、羅馬の Augurs（オーガー）（卜占）にも劣れるもの——僞善も今の世には甚多く存して居るけれど其が爲めに宗教は研究を價せぬとは云はれぬ。

勿論實際の生活上に於ては以上の相反せる二說の中間位を保たうとするのは誤であらう。宗教に對して相當なる敬禮を拂はぬ者には吾人は決して贊同はせぬ。迷信や僞善の跋扈を見ては、吾人は決して看過はせぬ。驅逐せんけりやならぬ。けれども宗教の

研究者としては吾人は此様なことに係はつて居てはならぬ。超然として居なければならぬ。吾人が迷信や妄想を研究するのは恰も生理學者が疾病を研究する様なものだ。彼等は疾病の原因や影響などを詮索する又其救治法をも考へる。けれども之を實際に應用することは醫師に委ねる。又物理學や化學の歴史由來を知つてる人は決して煉金家や星占者を怒らない。却りて彼等の見説の中に眞知識の萌芽を發見する。宗教學研究者が迷信や妄想に對するのも之れと同様だ。彼は宗教とは何ぞや。宗教は人心中に如何なる基礎を有せる乎、宗教は如何なる法則に從つて史的發展をなすかを究明せんとする者である。而して此目的を達せんが爲めには、自分が眞正として信じてる宗教計りを見るよりも、寧ろ誤見迷想と思はれるやうなものを研究する方が遙に有效なことが多い。

或は言語の比較研究を非難してこんな言を云ふ人がある、曰く、言語を研究するのには實用上の目的を眼中に持たなければならぬ。一時に多數の國語を學ばうものなら、確乎たる據所を失ふ恐があるから實際上に必要な丈けの少數の國語に限て置くがいゝと。所が之れと同一の論法で宗教の比較研究を排斥する人がある。多くの宗教を學ぶ時は之が爲めに自家の證信に動搖を來す患がありはせぬかと心配するけれどかくの如きは杞憂に過ぎない。

抑も比較と云ふことは何等の利益を齎らすだらうか。云ふ迄もない、凡そ高等なる知識は唯比較によりてのみ得られるのだ。殊に近世の科學的研究は皆、比較を基としてやる。が今試に、言語學が比較によりて得たる結果は如何なりしかを顧みよう。從前、Hebrew（ヘブライ）語は天啓の言語であると、凡ての國語の根本であると云つて、音韻上若しくは意義上の漠然た

る類似を理由にして、他の國語はヘブライ語から派生したのだと主張する偏見者流が少くはなかつた。彼等の迷夢を擊破したのは比較言語學者 Humbolt（フムボルト）や Bopp（ボップ）や Grimm（グリム）などではない乎。彼等の著作の中には敵者の如き獨斷的非科學的缺點は一つもないではない乎。彼等は凡ての國語には——其最劣等のものにもはた最高等のものにも——共通なる一定の體系と秩序が存して居る事を教へたではない乎。而かも之が爲めに、ヘブライ語の研究は其價値を失ひはしない、又我々は我々の母國語に對する敬愛を減じはしないではない乎。

されば比較の方法は之を宗教に適用するに毫も遲疑すべきではない。其結果として、或は、世界の諸宗教の起原、發達及盛衰に關する從來の諸說を變更せしむる事もあらうけれども、夫れは決して忌むべき事ではない。但し「神學に於ては、新しきもの盡く僞なり」てふ文句を盲信せざる限り。

Goethe（ゲーテ）の曰く、一つの國語を知れる者は國語を知れる者にあらずと、此反言（パラドックス）は移して以て宗教に就ても云ひ得られる。世間には、其信ずる宗教の本質は何ぞやの問に對しては默つてしまう、か、或は、只外面的標徴のみを列擧して、毫も內面的本質を御存じない方が少くはない。之れはつまり、唯自分等の宗教斗りを見て居て、他を知らないのに由來するとしか思へない。

「宗教には、少くとも二個の相異れる意味がある。猶太教とか、耶蘇教とか、印度教とか云ふ場合に於て、そこに所謂宗教とは「傳承若しくは法典的書類によりて傳へられ若しくは保たれ居る所の若干の教說の群」を意味して居るよう人が自分は宗教を變へた改宗したなど云ふのは全く此意味での宗教を指して居るのだ。基督教を去りて婆羅門教に歸す

ると云ふは丁度、英語の代りに印度語を話すと云ふ樣なものだ。

然るに宗教には又別の意味がある。人間には言語の凡ての史的形式とは獨立に「言語の能力」と云ふ者がある如く、凡ての史的宗教とは獨立に「信仰の能力」と云ふ者がある。人間と獸類と異なる所以は宗教を有すると然らざるとによるなどと云ふ場合に、其所謂宗教とは基督教若しくば猶太教等を指して居るのではない。或特殊の宗教を意味してるのではない。「人間をして無限を覺知せしむる、但し感性及理性とは獨立なる、寧ろ反對なる一種の心的能力若しくは素質」を云ふのである。若しかくの如き能力が人心中に存じなつたならば如何なる宗教例へば偶像崇拜若しくは呪物崇拜の如きも全く不可能である。吾人若し注意して耳を傾けるならば、凡ての宗教には、不可思議的を思議せんとし不可言語的を言說せんとする苦悶呻吟、無限者への渴仰、神への愛が潜むで居るのを聽取することができやう。希臘語の ἀνθρωπος（アントロポス）てふ語は果して後等希臘人が主張した如く ὀἄνωάθρων（ホーアノーアトロン）（上の方を眺める者）てふ語から出たのであるが、どうだか、夫は扨置いて、人間の人間たる所以は其顏を天に向け得る事にある、顏を天に向け得るは只人間あるのみであると云ふ事は確かである。感性や理性が與へてくれるのではなく、否寧ろ彼等が拒否せんとする或者を追慕し渴仰し得るのは唯人間ばかりであることは疑はれない。

哲學の內に、感性的若しくは直觀的（インチユイチーブ）知識の條件を究明する科目があり又合理的若しくは概念的知識の條件を詮議する科目があるとすれば、こゝに又第三の科目を容るゝの地がなければならぬ。第三の科目とは卽ち、感性及理性と相共働の、但し獨立なる第三の能力、精しく云へば凡ての宗教の根底に存せる無限感知の能力、の條件を研究する科目を

云ふのである。

獨逸語では此能力を Vernunft（フェルヌンフト）と名けて Verstand（フェルシュタンド）(Reason)（リーズン）及 Sinn（ジンネ）(sense)（センス）と別にしてある、英語では之に相當する語なし。予は唯「信仰の能力」と云ふより外優れる語を知らず。但しかく云ふ時は其信仰てふ語は只次の如き事物に就てのみ用ゆべき者と定め置かねばならぬ。曰く「理性もは た感性も之を證する能はず而かも吾人は其存在を拒否する能はざる、吾人以外の或者が要求し設定する事物」。(譯者曰ふ我國にては Verstand も Reason も共に理性と譯す。英語の Reason も學派によりては Verstand と區別して Vernunft の義に用ゐる。かゝる場合には Understanding（アンダースタンディング）を Verstand に當てあり。吾國にて單に「理性」と云ふ時は Vernunft も Versand もこめて意味するが如く解さる)

抑も近世の思想史を回顧するに、カント以前に於ては、人間の一切の知的活動を感覺から導き出さうとする學說が最も勢力を持つて居た。此說の定句（アオーミュラ）は卽ち Niiil in intellectu quod non ante fueri in sensu（ニヒルインインテレクタ クオッド ノン アンテ フエリ イン センス）(知力中にあるものは何れも甞て感覺中にあらざりし事なし)である然るに Leibnitz（ライプニッツ）は之に反して主智說を樹て、(Nihil-nisi intellectus（ニヒル ニシイ インテレクタス）(智力以外何もある事なし)と云つた。之に續いて起つたのがカントである。彼は、認識には感覺の與件（ダーメ）の外に、時空の直觀及悟性の範疇が必要てあると唱へ、此範疇は先天的性質のものであると云つた。然るに彼は、智力には有限を超越するの力卽ち無限に近づくの能力はないと云つて之を論證せんと力を極めたが、若しこうすると、人間が無限を望む通路が閉遮される事と相成る。そこで彼は「實踐理性の批判」で、其閉ぢた門の傍へ一つの小扉を開らくべく餘儀なくされた。此最後の點こそ實に彼れの尊まるゝ所である、

何故と云ふに、果して哲學なるものは只現に在るものゝみを說明するに止まり當にあるべきものには及ばないものであるとしても、若し人間には、第三の能力即ち無限を覺知するの能力が又に宗教上に於てのみならず、一切の事に於て存して居ると許されたならば人間は安心する事ができる。否之が許される夫迄は安心しない又安心ができないのである。此能力は理性や感性とは獨立なもの、或意義に於ては矛盾するものゝ、而かも宇宙の太初より存して居つて、感覺によりても理性によりても、敗られない眞の力である。多くの場合に於ては感覺や理性を打破るに足る唯一の力である。(予が玆に能力(ファカルティ)と云ふは古代心理學者の云ふが如き、獨立的の靈魂力を意味するにあらず。活動の一つの樣式の義なり。)

○さて上述の如く宗教てふ語には二個の意味があるから、從つて、宗教學は分れて二部となる。其一は宗教の史的諸形を研究するもの、之を比較神學(Comparative Theology)と云ふ。其二は如何なる條件の下に於て宗教は——最も高等なる形のにせよはた最も低き形のにせよ——可能なるかを究明するもの之を理論的神學(Theoretic Theology)と名ける。

吾人が是からやらうとするのは前者卽ち比較神學である。勿論後者卽ち理論的神學の研究の來る日も遠くはあるまいけれど、是は世界中の諸宗教の比較研究によりて得らるる所の者を十分に多く集め之を分類し分析したる後でなければならぬ。こうなつた時には古來ありふれの神學は丁度、Boppの比較文法學の傍へ Vossius や Lunnep 等の著書を持て來た樣な觀があるであらう。

理論的神學、精しく云へば、信仰を可能ならしむる內的及外的條件の分析研究、をやつて居る學者は昔から隨分澤山あつたのに、比較神學は

何故近頃迄起らなかつたらう。奇なるが如し而かも之決して奇ならず。理由は簡單なり。比較研究に資すべき材料が缺乏して居たからである。然るに今日に於ては其材料は實に豐富で、如何なる大手腕も到底獨りでは盡く處理する譯にはいかない位である。

世人の普ねく知れる如く、彼の Akbar（アクバル）帝（一五四二―一六〇五）は宗教研究に熱心であつて、猶太教徒、基督教徒、回教徒、婆羅門教徒、波斯教徒などを皆朝廷に招き入れ、且つ出來得べき限り多く諸種の聖典を蒐集し之を翻譯せられた。所が今より僅三百年以前に此大帝が集め得た所は、實に今日の一貧學者の藏書よりも遙に憐れである。彼が種々の苦心魂膽を以て得たと云はるゝ韋陀（ヴェーダ）は Atharvan（アタルワン）と Upanishad（ウパニシャッド）の幾分と丈だ。今日吾人が持つて居る Zendvesta（ゼンドエスタ）はアクバル帝が波斯教の聖者 Ardsher（アルドシェル）から授かつたものよりも遙に完全で且つ正確なものである。且つ波羅門教や波斯教や回教よりもずつと大切な佛教の如き者が、彼が各木曜日の夕に開く講筵の上の題目とはならなかつた。彼れの大臣 Abulfazl（アブルファゼル）は自分は佛教研究をやらうとするのに助ける人がないと云つて嘆息した事がある。然るに今日に於ては吾人はパリ語、ピルマ語、シャムロ語、梵語、西藏語、蒙古語、及支那語等で書いてある佛教書典を全部見ることができる。若し此處に何等かの缺陷があるとするならば、夫れは唯此等の書類の完全なる翻譯がないといふ事丈けである。但し支那の孔老の書は精良な翻譯が出來て居るから夫によりて研究することができる。

現代が享受せる利便は啻に之に止まらず。宣教師共はアフリカやメラネシヤ等の未開野蠻の宗教に關する材料を盛に集めてくる。是等は皆宗教發達の研究に資すべきもので、言語學に於けると同樣である。

然るにこゝに尚一層重要なる利益がある。他でもない。聖典批評の學

が教えて呉れた所の法則である。今日に於ては誰しも一つの書を引用して我論の證とする際には皆此法則に從つて居る。精しく云へば、其書は何の時代に出來たか、場所は何處、著者は誰、記者は果して其事件の目擊者であつたか、或は傳聞者であつたか、若し後者であるとすれば少くとも其典據は其事件と同時代のものであつたらうか、記者は或は黨派的感情の爲めに制せられて曲筆したやうな形跡はなきか、又は全部共に一時に出來たのだらうか、異れる時期に於て生ぜしものか、果して然らば各部分の時代を定め得るか、等を詮議濟の上ならでは其書を引用するやうなかつな事はしない。

かくの如き精細なる批評的精神を以て古代宗教を研究した二三の堪能なる學者は各宗教に就て、其眞に古代のものと比較的に近時のものとの間、又教祖及其直弟子の言說と後代の思想寧ろ後代の訛傳との



間に峻別を立てた。勿論、後代の發達、訛傳及改良も其自身に於ては價値なしとせず、だが、丁度、諸國語の比較をしようと思はば先づ其各の古代的の形を知らんければならぬと同樣に、諸宗教を比較し其價値を決定しようと思はゞ先づ其等各の原始的の形に就て明瞭なる概念を得んければならぬ。今一二の例を擧げて御話をしやう。

正統派の回教徒共は頻りとMohammed（マホメット）が奇蹟行つたことを誇りがほに喋々するけれど、モハメット自身はCorau（コーラン）の中に、自分は他の人々と同樣なものであると明言して、奇蹟を行ふことを非難し、奇蹟をは只Allah（アラー）大神の大事業例へば、日の出、日の入、雨、露、人獸、草木の發育等に於て現はれるばかりのもので、是等のものこそ、眞の信者の眼には眞の奇蹟であると云ふて居る。其言に曰く、我は唯警告者たるのみ。我は汝等が日夕見る所のもの〳〵外何等の奇蹟何等の休徵をも示す能はざるなりと。[1][2]

1 スタンレイ、レーンプル著「豫言者モハメツドの演說及茶談」序論三六頁及九一頁參照(The Speeches & Table-talk of the Prophet Mo'ammad' by Stanley Lane-poole, 1882. Introd. p. XXXVI & XII.

2「今の世は奸惡なり、汝等休徵を求むとも豫言者ヨナの休徵の外何の休徵をか與へられんや」(路加傳十一章二十九節)を比照せよ。

恐らくは佛教の話譚ほど荒唐怪誕を極めたのは世界中何れの宗教に於ても其比はあるまい。然るに、釋迦自身が命じたる戒律の中には、他人より要迫せられた場合にあらざるよりは決して奇蹟を行ふべからずと明言してある。而して釋迦が弟子に、必ず行へよと命じた奇蹟がある。夫は如何なるものぞと尋ねるに、曰く汝の善行を隱せよ、而して汝の行ひたる罪を、世界の前に告白せよと。是れが佛の所謂眞の奇蹟なのだ。

又近世の波羅門教は階級制度を基礎とし此制度は岩石の如く動かすべからざるものとして居る。然るに、Manu(マヌ)法典中に記してあるやうな複雜な階級制度の事はエーダの中には一言も書いてない。のみならず、僧侶も武士も市民も奴隸も皆等しく梵(オフーマン)より出たりとしてある。

典據の批評的陶汰は、今日に於ては宗教研究者に安心を與へるほどには未だ十分成就してゐない、尙々開拓すべき餘地多しだ。けれど端緒は已に開かれて居るのだ。そして、端緒の開かれた丈けでも既に宗教研究者に心得を授ける程の效果はあるに相違ないそれで、原始のエーダの數を研究するには先づ、Rigveda(リグヴエーダ)と Sâma(サーマ), Yajur-(ヤジユール), Atharva(アタルワ)を區別し、更にリグの內に就て古き部分と新らしき部分を區別せんければならぬ。勿論之をなすには語形、文法、音韻等の微なる異同をたよりとするのである。

次に又 Ahuramzda(アフラマスダ)崇拜を唱へ出した開祖其人の動機や衝動を了解し

やうと思はゞ Zendvrta（ゼンドヴスタ） の中にて、Gâthâ（ガーダー） 語で書いてある部分を依據とせんければならぬ。何となれば波斯教の經典に現はれて居る方言の中ではガーター語が最も原始的のものであるからだ。

次に又、佛教を批評するには、三藏（トリピタカ）の中でダルマとアビダルマとを混同してはならぬ。何故と云ふに、二者共に同じく佛教の典籍には相違ないが、夫等各の思想は決して同一でなく、宗教思想發展の異なれる時期に屬して居るのであるからだ。

聖典成立の過程を知らうとするには之を佛教史に見るに若くはない。佛教に於ても他教に於けると同様に、其教祖の在世中は師の言說や事蹟を筆錄するの必要はなかつた。目の前に恩師を見て居る丈けで十分であつた。又滅後の成行に關しては弟子等は少しも心を煩はさなかつた。記錄蒐集の企ては佛滅後に於て初めて起つたので、此時は苟も佛



の光輝を增すべく思はれる事柄は何くれとなく喜んで迎え集めたのである。それで佛を神聖なるものとする事に反對するかも知れぬと思はれるやうな人々は此結集には與らしめなかつた[1]けれども異論異說の起り來ることは到底避け得べきでない。愼重なる熟議熟考をなすものはなく相互に異端外道[2]と罵り合つて、遂には政治上の權力者に請願して爭を決せなければならぬ始末に立至つた。夫れは卽ち阿育王である。是に於て彼は多くの長老を招き寄せ、爲すべき事と爲すべからざる事とを命じ、且つ某々の書典は異端と考へらるゝ故排斥せよと勸告した。

1 大史(Mahâvaṃsa, p. 12)に曰く他僧の出席するを許さずと(Nânâ-ehi tattha vatthabbam iti)

2 Nâstika, Pâshaṇḍa.

今茲に、當時、王がマガダの會に告げた言を擧げやう。第二の Bairat（バイラト） 岩

の刻文の中にあり、ケルン氏の譯による)マガダ王 Priyadasiu(プリヤダシン)は本會を歡迎し共幸榮を祈る。佛と信と會、此三者を我は如何に尊び愛するか、是夙に汝等の知れる所。我主、釋尊の語り玉ひたる事は凡て善し、故に之を以て典據となさゞるべからず。かくてこそ眞信は永久に榮ふべけれ。我は此等の書を貴びて第一に推す。曰く、戒律綱要、師の超自然力、未來の恐怖、仙者の歌、禁欲に關する諸經、優波帝沙(Upatishya)問經、盧僞に關して羅候羅に向つて佛の與へし忠告、と是なり。是等の書は僧俗共に、絕えず學習し記誦せんことを要す。此目的の爲めに我は是等を記錄し我の意向を明にせんことを望む」(直譯)とある。

1 ウバチシャは舍利弗の一名

2、印度古物誌五卷、二五七頁(Indian Antiquary vol. V. p. 257.)カンニンガム氏印度刻文集(Cunningham, 'Corpus Inscript. Indic.' p. 32)オルデンベルヒ氏律藏(Oldenberg, 'Vinayapitaka' vol.I. Intr.d. p. XI)參照

今一つ此處に、學者の注意すべき事がある。眞贋の鑑定である。Voltaire(ヴォルテール)氏が「泰西が東洋に負ふ最貴の賜」と銘打つて出版した Ezour-veda(エズール・ヴェダ)は僞書であつた。ヅォ氏は全く欺されたのだ。Jacolliot(ジャコリオ)氏の La Bible dans l'Inde(印度の聖書)も此類だ。

苟も其書の原本に就て讀むことのできる人ならば、こんな誤謬に陷ることは決してない。今日に於ては吾人は、でき得る限り原本に就て讀まむければならぬ。希臘(ギリシア)語を知らずにホーマーを語り、ヘブライ語を知らずに摩西(モーセ)教を談ずるものがあつたら我等は何と評するであらう。されば Mathew Arnold(マシウ・アーノルド)氏が La Science des Religions (宗教學)をヤタラに嘲笑なさるのを我等は決して怪しまない。君は「アールヤ人の聖典が波斯及印度から、パレスタインに入り、そこで耶蘇やパウロやヨハヂの手にする

所となりて漸次に改良せられ完成せられ、其間に超絶哲學的性質を附與せられ遂に今日見る如き基督教の教義と發達したのだ」などと眞面目に唱へられたが。こんな事は、苟もエーダや新舊約書を其原本に就て讀み得ん程の者ならばどうして云ひ出さうぞ。又「基督教は元來セム人から來たのでない。既にエーダの讃歌中にチャンと含まれて居る、基督教の教義は、エーダのアグニ神の說だ。化身は火の產出力を表示したのだ、父、子、靈の三位一體說はエーダにある日、火、風の三體說に外ならぬ。而て、神は宇宙の大原である」などいふ樣な說は Colebrooke（コールブルック）や Lassen（ラッセン）や Burnouf（ビュルヌフ）やの口からは夢にも出やうとは思はれぬ。アーノルド君はビュルヌフの名を引證して居られるが、どこのビュルヌフ氏の事だらう。Angene Burnouf（オイゼース ビュルヌフ）氏には實子も養子もないことはア君も御存じの筈だ。

然るに茲に猶又一つの注意すべき事がある。それは、古代の言語は今日のものと同じでない、東洋のは西洋のと同じでない、彼此同一視してはなぬ事である。同じ西洋にしても、英語と佛語とは其同一語でさへ意味が必ずしも一致してゐない「然るを況んや、古代のセム語を今日の言語で解釋しやうとするならば、どうして誤りに陷らぬ事のあり得べきぞや。

言語と思想とは常に相並行する。舊約書時代に於ては、語も想も尙未だ抽象時代に達して居なかつた。例へば自然力と超自然力とを區別することを知らなかつた。今日の我々ならば「內外の誘惑」と云ふべき所を、彼の時代の人等は、人間の形若しくは動物の形したる誘惑者を持出してくる。「神の不斷の冥護」と云ふべき場合を「神は我れの岩なり、城なり、塔なり」などと云のである。申命記、三十二章、十八節に「彼等を生み玉へる岩とさへある。但し茲の意味はホーマーの詩中の「人間の生れ出たる岩」と

は決して同一でない事は云ふ迄もない。今日吾々が所謂「天佑」と云ふ所の者は、彼等には翼のある使者であつた。「神の導き」を彼等は「光の柱」としてゐた。

勿論上述の場合は何れも其中心の眞實の意義を叩いたならば甲乙同一に歸することは疑はれない。吾人若し唯言語の外形、皮相のみを見て、以て古代の思想を理解し得たと思ふならば、ゆゝしき誤りである。言語上に未だ抽象的と倶體的との區別、物的と心的との區別が確と定まるに至らなかつた時代でも、人々は一種異樣の、今日の吾人には知り得られないやうな仕方で、此等の區別を辨きまへて居たのである。此事をよく腹に入れて居らなければ、古書を讀む際必ず誤謬に陷るのである。否私は、宗教史上の難點の過半は古代の言語を解するに近世の言語を以てし、古代の思想を解するに近世の思想を以てするの誤りに由來すると斷言したい。此誤解は特に言語が精神よりも神聖なりとして崇められた時代に於て行はれ易いのである。

比較神話の研究によれば、這般の誤解は、最古の文書よりも尚ほ古へに於て已に起つて居る、而して宗教思想發達の上に多大の影響を與へて居る。ホーマーやエーダ以前に於て已に這般の誤解作用が發生して居る。但し其影響の著しくなつたのは後來の事である。

抑も此誤解は言語其物の本質に由來せる必然的の過程である。夫故に、上述の如くアールヤ語に於ても之があつた。然らば如何にしてセム人の語、特にヘヴライ語のみが之を免れ得やうぞ。唯ヘブライ語は其性質として、アールヤ語が被つた程の著しき影響を受けなかつたと云ふ迄である。併し創世紀第一章を讀めば、古代の言語は古代の思想に對して如何なる感化を及ぼしてるかゞよく知れる。

創世紀第二章には、神は最初の人間を作つた後、其肋骨の一つを取つて女を作つたとある。之は文字通に見ては解することができない。然るに第一章には「神は己れに像とりて人を作れり、彼は男と女とを作れり、神は彼等に幸榮を望み、豐かなれ、增せよ、地に充てよ、地を征服せよといへり」と是は第二章の肋骨の話「神は己の助手にとて、エデンに住みける者の肋骨の一つを取りて女を作れり」と相違して居る。如何様に調和し得られやうか。一寸考へねばならぬ所が最初に先づこういふ事を知て置かなければならぬ。ヘブライ人は今日の吾々なら「同一物」と云ふべき筈の處を「骨」と云ふて居つた事だ。是はアラビヤ人が「物の眼」といつて居たのと同じである「骨」とか「眼」とか云ふのは「實體（エッセンス）」とか或は「魂」とか「自己」とか云ふのと同一義であつたのだ。かゝる例はエーダの中にもある。曰く、「骨を有せる者を生じたる時誰が其最初に生れたる者を見しや」とある。



是は無形の者が有形となつた時若しくは實體を有せざる者が之を得たる時と云ふ程の義である。次に問ふて居る文に、「世界の生命と血と魂とは何處にありしぞや」とある。エーダの古語では「骨」「血」「息」などは何れも唯物質的の意味斗りでなく、夫れ以外の或者をも意味してゐたのだ。アートマン（Ātmān）てふ語は本來は「息」の義だが後になつて代名詞となり「自己」の意味になつた。ヘブライ語エツエン（Etzen）も同じやうに元來は「骨」の義であつたが後には唯の代名詞的（プロノミナル、アデエクテーブ）形容詞となり「自己」若しくは「同一」の義となつたのだ。

以上に說明した事を心得たならば、明かの疑問は容易に解せられる。アダムがエヴに對して、近世の語でならば「汝は我と同一物なり」と云ふべき處を「汝は我の骨の骨肉の肉なり」と云つたのであらう。こんな言ひ方が數代も打續いた後には物質的の解釋が必然に起つてくるであらう。太初の女は太初の男の肋骨の一つから作られたと云ふやうな考が必ず

起つてくるであらう。殊に肋骨にはぶら〳〵してるのがあつて、取り去つてもよいやうに思はれるものだから、此說は愈俗間に受けられる事になる。かゝる誤れる解釋も一度確立されたる以上は、其奇拔は偶以て俗人を驚かすに足り無智の民衆の間に傳播するやうになる。

古語に於ける此種の誤解はセム語に於てもアールヤ語に於ても必然的に起つた過程であつた。不可避的の過程であつた。今セム語に於ける他の一例を擧げて見やう。

Berosus（ベロスス）と云ふ人がバビロンの宗教の事を書いた斷片がある。今夫れに就て御話しやう。

猶太人の宗教とバビロン人の夫れとは御親類であることは疑はれない。然るに聖書の語は頗る簡潔朴素であり、バビロンの神話は甚荒唐奇怪であつて、一見しては、兩者は氷炭相容れざるかの觀がある。而かも實は夫れは皮相の觀に過ぎない。

Berosusがバビロンの宗教の事を記した書は正確なものであることは爭はれない。彼は歷山大帝と同代の人で、バビロニヤ生れで、Belus（ベルス）神の堂に居た僧である。彼は大帝に獻上する爲めに希臘語でカルデヤの歷史を書いた。其書の第一卷には本書はバビロンに保存されたる天文記及年代記より輯錄したるものだと書いてある。其間星霜を經る約二十萬年（Syncellus（シンセルス）氏によれば十五萬年）。然るにベロススの書は逸失して、只其拔萃がAlexander Polylister（アレキサンダー・ポリスター）の手に保存されてゐた。是は紀元前一世紀頃の事である。然るに此拔萃の書も今は亡い。但しEusebius（オイゼビウス）（二七〇―三四〇）が其著Chronicon（クロニコン）（年代記）を書いた當時には、まだあつたものと見えて、クロニコンの中に引用されて居る。然るにオイゼビウスの書も傳はつて居ない。唯其幾部分がアルメヤ譯で吾人に傳へられて居る。其中

に、ベロススのバビロン史の文が載つて居る。此アルメヤ譯は一八一八年に出版せられ、Niebuhr（ニーブール）氏が始めて、此書の重要なる價値ある事を云ひ出した。

さて、オイゼビウスの書の拔萃の多くはコンスタンチノープルの權大僧正 Georgius Syncellus（ヂオルギウス ヒンケルス）と云ふ人の手に保存されて居た。氏は紀元後八百年頃に年代紀を著した人である。氏の所藏によりて希臘の原本とアラメヤ譯とは多くの箇所に於て比較することができる。而してアルメヤ譯の信憑するに足る者であることが分る。

さてベロススが開闢に關するバビロン人の傳說を誌して居る文に、曰く、「凡てが暗黑及水なりし時ありき。其中に怪物は生せられ種々の形を有せりき。人間には二箇の羽翼あり、或者には四箇あり、或は一身二面、は一頭は女、一頭は男なるあり。兩根共に具せるあり、羊の足及角を有せる人間あり。馬の脚を有せるあり後足は馬、前足は人なるあり。Hippokentaur（ヒポケンタウス）（希臘の半人半獸の神名）に類似せり。牛は人頭を有し、犬には四身ありて其後部より魚の尾出づ。馬は、犬頭を有し、人間にも馬頭馬體而かも魚尾なるあり。他の動物の中には、凡ての種類の動物の形を具せる者あり。此他、魚、蛇、爬蟲、等奇怪なる生物あり。各相異れる容貌を有せり。其等の肖像はベルス神の堂にあれば就て見ることを得べし。凡てのものゝ長として一つの女ありき。Omorka（オモルカ）（armen, marcaja）と稱す。カルデヤにては Tha（ダヲツ）希臘にては Thalassa（タラツサ）（或は海）と譯せらる。かくて、凡てのもの集まりし時、ベルス來り、其女を兩斷し、其半を以て地を作り、他の半を以て、虛空を作れり。かくて彼は彼の女の內にあるあらゆるものを滅しき。されど此物語は比喩として解せざるべからず。何となれば凡てが尙濕潤にして被造物が其內に含まれし時、神（ベルス）は己れの頭を切斷せしが、諸神は夫れ

より流れ出たる血を土に混して、以て人間を作りき。是を以て、人間には理性ありよく神智を享有するを得るなり。かくてベルス、即彼等の所謂Zeus（ゼウス）（又アルメニヤ人はArmazd（アフマズド）と呼ぶ）は暗黒を兩斷して天と地とを分離し、以て世界を作れり、かくて光の力に耐へざる動物は亡びき。かくて、ベルスは荒蕪の地と豐饒の地とを見、諸神の一つに命ずらく、我頭を斬り、夫より流るゝ血に土を混じて、以て空氣に耐ゆる人と獸とを作れと、かくて又ベルスは恒星と日と月と五箇の遊星とを作れりき」と（直譯）

一見した所では何人と雖、此のバビロン人の開闢說の無意義（ノンセンス）と混雜とに吃驚せぬものはなからう。然し吾人は此說話の中に明に次の諸要素を認めることができる。

一、太初には暗黑及び水があつた事、

ヘブライの方では「暗黑は大海の面を蔽へり」となつて居る。

二、天と地と判れたこと、

ヘブライの方では「水の直中に蒼穹あらしめよ、かくて、それよりして、水と水とを分れしめよ……かくて神は蒼穹を天と名け、乾ける陸を地と呼べり」とある。

三、恒星、日、月、及五箇の遊星の作られた事、

ヘブライの方では、かくて神は二箇の大光を作れり、より大なる光をして晝を支配せしめより小なる光をして夜を支配せしむ、又彼は恒星を作れり」とある。

四、種々の獸類が作られた事、

五、人間が造られた事、

此內、獸類の創造に就て特にバビロン人は荒唐なる想像を逞ふして居る。而して夫等異形の者の肖像はベルスの堂にあると書いてあるし、又

今日英國の博物館の所藏には此等の記述と一致してるものがあるから、此等の說話は、古人がバビロンの殿堂にあつた奇異な偶像を見て考へ出した構造說に過ぎんと云ひ得るかもしれん、けれども此事だけでは未だ十分に古代的思想を說明したとは云へない。

こゝで最も肝要な事は、人間は神智を分有して居るとのバビロン人の思想である。此思想を表はし居る言語こそ甚だ忌はしく恐ろしきものであるが、底を叩けば、ヘブライの「神は人間の鼻穴に生命の息を吹き入れ給ひき」と云ふのと畢竟同一である。共に同一思想の微弱なる發表に外ならぬのである。

苟も古代傳說の眞義を解せんと欲せば先づ其國語の特質眞髓を熟知せんければならぬ。例へば希臘語、羅典語、梵語等の如き名詞に性（ゼンダー）を付ける國語に於ては奇怪なる神話が必然的に生じてくるけれど、性を表はさない國語はかゝる說話を產しない。Bleek（ブリーク）博士は曾て「南亞弗利加の比較文法」の序に於て次のごとくに云ふてゐられる。曰く「言語の形式はそが發表する思想の上に多大の影響を與ふるものなりとは既にマックス、ミユラー氏の唱導せる所なるが、吾人は亞弗利加探究によりて愈其然るを確めたり。或人種（カフアー人 Kafirs チーグロー人 Negroes, ポリネシヤ人 Polynesians）等の祖先崇拜と他の或人種（ホツテントツト人 Hottentotts, 北アフリカ人 Northafrican, セム人 Semitic, アーリヤ人 Aryan 等）の天體崇拜は各其國語の性質に負へる所あり、性を表はせる國語を持てる國民は高尙なる詩才を有し、諸の無生物に生命を附與す。此事は殆んど凡ての神話の基とはなるなり。然るにカフアー人等に於てはかくの如き事を見るを得ず」と、そこで私はアフリカの Zulu（ズル）語に於ける一例を擧げようと思ふ。

博士 Callaway（カラウエー）氏に據れば、ズル人は皆、各家族及各部族の祖先を第一に拜して居るが、又人類一般共通の祖先をも信じて居る。之に Unkulunku-（ウンクルンクル）

「ロ」と云ふ名が附いて居る。曾祖父（グランド・ファーザー）の義である。而して、此者の出所を尋ねるとズル人は大抵皆「葦（ヨン）」から分れ出たのだ」とか「葦（ヨン）の床から出たのだ」と答へる。との事である。私は之を聞いて、如何に、言語なる者は、神話を織り出す上に其作用を逞ふするかを思はざるを得ないのである。梵語の Parvan（パルワン）は「葦の一節」が本來の意味であつたのだが、夫れが轉じて「一員（メムバー）」の義となり、後更に家族に移りて「幹より出づる芽」の義となり又幹、種族、系統等の意味を表はすやうになつた。Vansa（ワムサ）なる梵語も元は、葦又は竹の意味であつたのだ。ズル語で「葦」は Utlanga（ウトランガ）と云ふ。精密には「出芽し得る葦」の意味である、そこで此語は比論的に「生物の源」の意味を有することになつた。故に「祖先は其子孫のウトランガである」。今日のズル人は此言を如何に解して居るにせよ。太古に於ては、人間が眞に葦から出て來たとの意味ではなかつたのだらう。カラエー氏の言に「義は失せて語のみが傳はりたる事は疑ふべからず」とある。私が此ズル人の神話に付て試むる解釋は至極簡單である。即ち次の如くである。

太古ズル人は「我等は一つの葦より出でたるなり」と云ふて居つた。其時代では其所謂「葦」とは梵語の Vansa（ワムサー）と同じで、即ち、彼の言は「我等は一つの祖先の子孫なり、一種族の部員（メムバー）なりと程の意味であつた。然るに後來ウトランガが「一種族」を意味するに至つた時にもまだ原始の「葦」の意味が殘つて居つたのである。そこで民衆共は比喩的の語、比喩的の想を知らないから、人は眞に葦から出たのだと、解したのだらう。又ウトランガを固有名詞と見て、之を全く人類の祖先と解した人々もあるだらう。現に今日に於ても、或ズル人はウンクルンクルを最初の男、ウトランガを最初の女として居る。

凡そ何れの國民にもあれ、何れの部族にもあれ、家族にもあれ、いつし

か、一つの祖先を欲しがつてくるものである。比較的近世の事であるが Briton（ブリトン）人即大英の國民が自分等には祖先がない、遺憾であると嘆いたので、Mouncuth（モンマス）の Geofrey（ゼオフレイ）氏はブリトン人はブルータス（Brutus）の子孫であると云つて其證明を與へた事がある。

之と同様に、Hellenes（ヘレネス）即ち Hellas（ヘラス）の古の住民共は自ら Hellen の子孫であると唱へて居つた。ヘレヂスてふ語は始めは只 Thessaly（テッサリー）の一部族をのみ指いてゐたのだが、後には全國民の稱となつた。そこで Aeolia（イオリヤ）人の祖先 Aeolos（イオロス）も、Doria（ドリヤ）人の祖先 Doros（ドロス）も、Achaeos（アケオ）人及 Ionia（イオニヤ）人の祖先 Xuthos（クストス）等何れもヘレンの子なりとせられた。尤もな事だ。

然るに玆に然らは其ヘレンの父は誰なるかとの問の起るも尤もだ。ヘレンが果して全人類の祖先であるならば Zeus（ゼウス）大神の子であらねばならぬ。或者はこう解釋したが又異説もある。他の諸國と同じく、希臘にも洪水の傳說がある。之に據ると、此災害を免れたのは Prometheus（プロメテウス）の子でテッサリの王 Deukalion（カリオン）（父から前以て洪水があるぞと教へられたので）と其妻の Pyrrha（ピルラ）と丈けであつたとある。すると、希臘人には二つの祖先があることになる。ヘレンとデウカリオンとである。そこで、ヘレンをドイカリオンの子とするより外はない。

吾人若し古代語の特質眞髓を捕捉するならば上述の事はよく理解することが出來る。

希臘の傳說は、デウカリオンは如何樣にして凡ての人間の祖先となつたかを說明して居る。曰く、彼と其妻ピルラとが石を後方に投げしに夫等の石は化して男女となつた。と、此話は甚奇怪である。ピルラと云ふ妻をドイカリオンが已に持つて居たのなら、ヘレンは其子であると云ふに於て何等の不思議はないのである。こんな附け加へへの話しのある

のが却つて不思議である。然るに此不思議も、語の由來を調べて見ると、事のう晴れるのである。抑もピルラは「赤き者」の義で、こゝでは「赤き地」の意味である、希臘人は自分等は本來希臘の地にはえぬきの民である、餘所から移住したのではないと云ひ舞する爲めに自分等の大古の母卽ちデウカリオンの妻をピルラと名けたのだ。所がもと〳〵希臘の洪水說でも、印度の洪水を免れたのは唯一人のデウカリオンがある計りなのである。そこで妻なくして如何に人類の祖先たり得るやとの疑問が起り、之に對して石を投げたと云ふやうな說も出てきたのらしい。希臘語では人民は Laos（ラオス）石は Lâas（ラエス）である。されば、ラオス卽ち人間は何處から來たのかと、子供が尋ねる場合に御母さんが、ラエス卽石からだと答へるやうな事は隨分ありそうだ。

私は上述の如き例はいくらでも擧げる事ができる。古代の傳說はどれにしても皆無意義のやうに見えて而かも意義がある。吾人若し、言語の訛傳てふ皮殼を除去するならば背理的な忌はしき說話と雖、其裡には美しき愛すべき理解し得べき核實を見出すことが出來るのである。

後世の誤解曲解を剝き去つて古代の原始的の意義を露出せしめたとて、其爲めに吾人は得る所あるとも失ふ所は少しもない。Haepheistos（ヘファイストス）が斧を振つて Zeus（ゼウス）の頭を割くと Athene（アテナ子）が跳り出すと云ふ話譚は、裏面から見ると、ゼウスとは輝ける空其額とは東方、ヘファイストスは未た昇りきらぬ若き太陽、アテナは曙光の泉より步み出で來る空の娘を指して居のであると看破したとて、夫が爲めに吾人は何等の損失をも感じない。



又 Apollo（アポロー）と Artemis（アルテミス）とが Niobe（ニオベ）の十二子を殺す譚は、其ニオベとは元來雪及冬の義であつて、春の神アポロとアルテミスが雪てふ可憐兒を

殺すと見た詩人の想像に過ぎぬと知つたとて、其が爲めに希臘の諸神が吾人の眼中に其價値を減じはしない。

抑も梵語や希臘語や羅甸語が未だ確然と定まらない頃、エーダ諸神が未だ拜まれなかつた頃、ゼウス神の祠が未だドドンナの柏の森の裡に建てられない頃—短く言へはアールヤ人種の分裂以前更に短く云へは今より四五千年以前には唯一の最高神のみが拜まれて居た、而して其神は他のとは取換ゆべからざる優れたる美しき名で呼はれて居たのであると知ることは何の價もない事であらうか、所謂其名とはディヤウス Dyaus, ゼウス Zeus, ユピター Jupiter, ティル Tyr 是れである。皆原始に於ては同一であつて、光、輝の意味である、此概念は後になつて一方では物質化せられて空、朝、晝となり一方には輝く天上界の實在、卽ち デヴァス Devas となつた。是ぞ卽ち神聖なるものゝ最初の名である。



之を要するに、言語的研究によりて、吾人は得る所あるも失ふ所は決してなし。古代宗教は猶古寶玉の如し。時代の錆（サビ）を除かば始めて其眞體は露現し、嚇々乎として純潔なる光澤を放つであらう。而して其際其中から開き示さるゝ像は何の像であらうか。父の像、地上凡ての國民の父の像であらう。其上書（ウハガキ）を、若しよく讀み得たならば、神の言葉は啻に猶太のみならず全世界凡ての國語にも啓示されてあることが知れるであらう——そが啓示され得べき唯一の場所に於て——人間の心胸に於て。

# 第二講

（千八百七十年二月廿六日）

宗教學研究に於ては其材料に缺乏を訴ふる憂は決してない。

通例、東洋諸國の宗教は、所依の經典を有て居るのと、之を有てゐないのとに區別する、然るに實際に就て見ると、所依の經典を有つて居る宗教は其數甚だ少なく、且所謂其所依の經典も、眞に教祖が述べた教義を其儘に傳へて居るのは甚だ少なく、何れも大抵屈曲變形せられて居る。けれども學者に取りては此等の書は云ふ迄もなく重要なものである。

先づ世界史の舞臺上の大役者と云へばアールヤ及セムの二大人種である。所が此各が、何れも典籍を有する宗教を二づつ持つて居る。アールヤ族の中には印度人及波斯人、セム族の中にはヘブライ人とアラビヤ人の宗教がある。而して印度人の宗教にも二つあり、ヘブライ人の夫れにも二つある。前者はバラモン教と佛教とで後者はモーセ教と基督教である。波斯教はエーダ教と淵源を同ふし、回教はアブラハムの宗教から派生したのである。今此流脈を圖にすると、




佛教はバラモン教の直接の後繼で且つ同時に對敵である。波斯教は韋陀教の派生であるが、併し最古のエーダの諸神崇拜には反對して居る所もあるのである。右と同様の關係がセム族の方にもある。但し年代

の順序だけが違つて居る。卽ち回敎は基督敎より後に出たのだけれど、波斯敎は佛敎以前のものである。

佛敎は右の婆羅門敎に反對して起つたのであるが、一時盛大になつたばかりで間もなく其本國に於ては亡びてしまひ、後ツラニヤ民族の中へ移り入りて、そこに本營を建てた。卽ちアールヤ族の宗敎から生れ出て而かもツラニヤ族を支配する主宗敎となつたのである。

基督敎はモーセ敎から出たのではあるが、丁度佛敎がバラモン敎に排斥された如く、猶太人に排斥された。故に猶太敎の改革者としては失敗に歸したが、セム族を去りてアールヤ族に移り入てからは、卽ち所謂猶太人から異邦民に移てからは、大に其眞相を發揮して世界の大宗敎とはなつた。卽ち、生れたのはセム族からであるが、終にはアールヤ族を支配する主宗敎となつたのである。

然るに玆に又セム及アールヤ以外の一民族で典籍を有する宗敎を二つ有つて居るものがある。孔老二敎を有する支那人が卽ち夫である。

上に擧げたる八大宗敎の經典は梵語、パリ語、ゼンド語、ヘブライ語、希臘語、アラビヤ語及支那語の七ヶ國の語で書いてあるのだが、是程の典籍を涉獵するのは、一人の學者に取ても左迄至難の事とは思はれぬであらうが、中々一寸見た樣な譯にはゆかない。手近い處先づ我等の新舊約書に關する或は歷史的の或は敎義的の注解書、異說の著述などは每年如何程出版されるであらうか。蓋し思半ばに過ぎるであらう。今道敎の所依經典老子道德經を見るに、此書は僅に五千二百語あるのみであるに然るに其註釋書は殆んど數ふべからざる程に澤山ある。(Julien 氏道德經 'Tsoie-king.' p. XXXV: p. 62 參照)。又回敎は最も新しい宗敎で且つ最も文字少き宗敎であるのに、其歷史を知らうと思ふと、用ゆべき材料

は中々澤山で容易に渉獵することができぬ。スプレンゲル（Sprenger）氏は其著モハメット傳（'Das Leben des Mohammed,' vol. 1. p. 9）に「此書の材料として用ひたる書名を列擧せば可なりの大冊子をなすべし」と云ふて居られる。

次にアールヤ人の宗教に移つて申せば、先づ、最も狹き意味でのバラモン教の書類と云へば事なく一擾（カカミ）の中にありそうに思はれる。リグ、ヱダ讃誦は其數僅に一千二十八で約一萬五百八十句ある丈けだ。所が其注解書は私の出版したのでは六大冊になつて、十萬行ある。各一行は三十二綴だから、總計三百二十萬綴になる。（拙著「古代梵語文學史」'History ofAncient Sanskrit Literature,' q. 220 參照）然るにリグヱダの外にまだ三種の韋陀がある。此等は教義を見るのには必要ではないが、供犧や禮式などを知らうと思へばどうしても缺くことはできぬ。然るに此等四韋陀の各には Brahmanas（ブラーマナ）と名くる註解がある。後代人の手に成つたものではあれど、古の梵語で書いてあつて、印度人は之を天啓の書として尊崇して居る。此書は韋陀讃誦よりも遙に〳〵浩瀚である。

上に擧げたのは何れも是れ原本である。處が此等の原本を基とせる種々の論說、評釋、語彙の類が上下三千年の間に於て無數に產出せられ綿々として今日まで尙續いて居る。然に夫等は皆正統派の述作である。之に反對の信仰及思想は又無數の書類を產出して居る。處が夫等に對してバラモン共は所謂大鐵槌的毒矢的辯駁をやつて居る。其爭論の激烈なるや實に千古の偉觀、世界無比である。然るに印度人の宗教思想を知るのには此外尙、法典類がある。史詩特に Mahabarata（マハーバーラタ）及 Ramayana（ラーマヤナ）といふ二大史詩がある。其他 Purana（プラナ）だの Tantra（タントラ）だのと云ふ書類もある。何れも採て以て參考に資せんければならぬ者である。然るに以上を通覽し

ても、未だ以て印度の宗教思想全體に渉つたとは云へない。古來此國には宗派の異別が實に無數であつて、各地至る所に宗教生活の中心ができて居て動もすれば割據獨立の勢をなすものだから、僧侶輩は之を統一しやうと苦心慘澹。Nanak（ナーナク）が建てた Sikh（シク）教の如きは殆んど獨立してゐるもので、自家丈けの經典もあり、僧侶もあり、一時は婆羅門教や回教の向を張つて侮るべからざる敵であつた。然るにこの派は十五、六世紀頃印度教及回教の腐敗に反抗して起つた所の多くの改革派中の只一つに過ぎない此派の所依典は Granth（グラント）と云ふ。此書は全體から云へばつまらぬものだが、中には折々詩的な意味深長な文句もないではない。Trumpp（トルムプ）博士の譯あり。'The adi Granth, or the Holy Scripture of the Sikhs translated from the Original Gurmukhi'。然るに此の書には種本がある。Granth（グラント）は大抵 Râmânûd の弟子 Kabir の書から採て來たものである。此書も學者は

一讀すべきである。

然るに吾人は未だ印度の第二の典籍宗教、卽ち佛教に付ては一言もしてゐない。佛教の典籍は實に無數とも云ふべきで、教徒は世界の大半を占領して居る。歐洲の學者は云ふ迄もない、佛教徒中の博學なる學者でも未だ全佛教の全經典を讀むだ者はあるまい。

南方佛教の所傳によれば、佛典は、もと八萬部(或は八萬四千部)あつたが、今では六千部丈けになつたとの事だ。(Burnouf（ビュルヌフ）氏印度佛教史緒論 'Introduction à l'histoire du Buddhisme indien' p. 37. 參照) Saddharmâlânkara（サッダルマー）經直妙法楞伽經)には、佛典は原本と註解と合せて二千九百三十六萬八千字だとある。序に云ふが聖書（バイブル）の英譯は三百五十六萬七千百八十字ある、(但し母音と子音を各一字つゝに算して)

現存の佛典は、南方佛教のはバリ語で、北方佛教のは梵語である。バリ

語の佛典は聖書の二倍程だ、英譯なら四倍あらう。Spence Hardy（スペンス ハーヂー）による と、本文は二十七萬五千二百五十句で註解の方は三十六萬千五百五十句あるとの事。（一句とは三十二綴音より成る一行を云ふ）

梵語の佛典は所謂、九つの Dharma（ダルマ）（九部或は九分？）だ。西藏譯は Kanjur（カンジュル）及 Tanjur（タンジュル）の二部門に分れてゐるが、合せて三百二十五冊ある。北京版では各冊の重量が四磅乃至五磅ある。

又此外に Jaina（ジャイナ）といふ一つの支派がある。教祖を Maha vîra（マハーヴィーラ）といふ。其以前にも同じやうな聖者が二十三人あつたと傳へてゐる。之を Tirtankara（チルダンカラ）といふ。マハーヴィーラは又 gnataputra（ジニヤータプトラ）又は Jñâtriputra（ジユニヤートリプトラ）又 Jnâtiputra（ジユナーナプトラ）（パリでは Nâtâputta（ナーダープッタ）、ヂャイナ、プラクリットでは Nâyaputta（ナーヤプッタ）と云ひ Pâpâ（パーパー）で死んだと傳へてゐる。[1] 若し其年を紀元前五百二十七年とすれば釋迦よりも古い人となる。兎に角闍伊那派と佛教との關係は當今未決の問題である。此派の經典は一つのプラクリト（地方語）で書いてあつて、Ardhamâgadhi（アルダマーガヂ）（パリでは Mâgadhî（マガヂー））と名づく。Siddhânta-dharma-sutra（シッダーンタ ダルマ スートラ）（經名）によると此派の經はスートラ、又はシッダンタと名け、大別して Kalpa sutra（カルパ スートラ）及 Agama（アーガマ）の二とし、前者が五、後者が四十五あるとの事。他の分類法によると、八部門に分ける。第一には十一の Angas（アンガス）第二に、十二の Upangas（ウパンガス）第三に四の Mûla-sutra（ムーラ スートラ）第四に五つの Kalpa sutras（カルパ スートラ）第五に六つの Chedas（チエダ）第六に、十の Payanna（パヤンナ）第七に Nandi str.（ナンヂスートラ）第八に Anuyogadvara str.（アヌヨガドヴラ スートラ）とで總計五十、之に註解を合すると六萬偈になるとの事[2]だ。但し今日に傳はつてる所のものは紀元後五世紀よりも古いものでは決してない。

1、Bühler 氏印度古物誌 Indian Antiquary VII. p. 143.

H. Jacobi. 氏 'On Mahâvîra and his predesessor'（マハーヴィーラ及其先行者に關して）印度古物誌 IX. 153 及同氏の Kalpasutra of Bhadrabâhu の序文參照

譯者云ふ漢譯では若提子又は尼犍子などとあり。

2、印度古物誌 IX p.161

次にアールヤ人の第三の典籍宗教の經典は Zend-avesta（ゼンド・アベスタ）といふ。原本甚乏しい、且つ缺陷が多い、をまけに此書には其本國人の施した注釋がないせいでもあらうが良飜譯を見る能はざるは遺憾な次第である。

最後には支那の宗教だが、孔子、教のは浩瀚ではないけれど注釋書類は殆んど測るべからざる程の數である、老子、教のは道德經と云ふ僅に五千語に過ぎないけれど註解は非常に多い。Julien（ジュリヤン）氏が譯された時參考に用ゐられたのが六十家以上だつた、而して夫等なしには通解し得られないとの事。此二教の外に、Fo（フオー）（佛）と云ふ宗教がある。是名は佛陀の漢語訛である。佛教は印度から支那へ入りて著しき變化もしたし又莫大の書籍を產出したには相違ないけれど未だ以て獨立の宗教を以て目するに足る程のものはなかつた。佛教は一方ではセイロン、ビルマ及びシャム、他の一方ではチバール、西藏、蒙古、支那、朝鮮及日本と、こう南北兩大部に區別される。そこで支那のは北方佛教に屬するけれども、バリ卽ち南方に屬する典籍も甚多く譯されて居り又信奉されて居る。

今假りに上述の幾多の聖典を涉獵し盡すとした所で未だ以て全人類の宗教を研究するに必要なる十分の材料を捕へ得たりとは云へない。是に洩れたので而かも甚肝要なるもの少からず。上述の中には希臘人や羅馬人の宗教の事は云はなかつた。Teutons（チウトン）人、Celts（ケルト）人、Slavs（スラーブ）人のも云はなかつた。此等の國民が、其神聖なる柏の森を切り倒して、基督教に同宗した以前は如何なる信仰を有つて居たらうか、之を研究するには如何すべきか。ホーマーや Hesiod（ヘシオド）の作は決して古希臘人の衷心の眞信

仰に關する消息を與ふるものでない。所依の經典でもない。而して羅馬人に於ては Illiad（イリヤド）や Odyssey（オヂッセイ）に比すべきものすら一つもない。チウトンやケルトやスラーヴの宗教に至りては、諸神の名さへも多くは湮滅して傳つてゐない。故に吾人は只彼處や此處から斷片的史跡を拾つて想像的に之を彷彿するの外はない。

上述のアールヤ族の宗教に於ける是類の缺陷は又セム族の方にもある。バビロン人、Assyria（アスリヤ）人、Phœnicia（フエニキア）人、Carthago（カルダゴ）人、回教以前のアラビヤ人の宗教の如きに至りては何等の所依の經典がないから、碑銘だの、傳說だの、固有名詞だの古諺だの、咒語などの傳り殘れるをたよりに推測するより外に道がない。

されど吾人をして、尙一步を進ましめよ。セム族の思潮が南東より北西に、印度河より Thames（テームス）河の方へ、Euphrates（ユーフラテス）河より Jordan（ヨルダン）河及地中海の方へ流れ來た其域床の面積は敢て狹ましとにあらねども、之を全世界の自餘の部分と較ては實に九牛の一毛である。今眼を高う擧げてぐるりつと見渡すとする。先づ目に付くのが Nile（ナイル）河畔に屹立するピラミット、そこらには螺堂（サヴイ）がある。殿堂の殘壘がある。何れも其壁面には書文字が書いてある。諸神諸女神の像が彫つてある。又埃及には有名の Papy-us（パピルス）に錄せる宗教的書類の卷物がある。輓近、研究は着手せられたれど、未だ太古埃及の信仰を知悉する程には至らない。

次にナイル河を沂ると、茲に全亞弗利加の地を見る。其處には Kraals（クラール）（蠻人の小舍）がある。家畜小屋がある。供犧の煙が、そこに昔は天に上りつゝあつたのだ。いや今でも上りつゝある處もある。が、まづ古アフリカの宗教の痕跡は今や非常の速力を以て湮滅に歸しつゝあるといつてよい。併し現時の殘存物より推測すると、蛇及祖先崇拜のあつた事、微かな

がらに來世の信仰もあつた事、さては天の至高神—白人にも黒人にも同じく父たる—の信仰の名殘りも認め得られるのである。

今眼を、アフリカの東岸から離れて海を横切らして、マダガスカル島からハワイの方へやると、其間に、島又島が點綴して印度洋及太平洋に連鎖をなして居る。其處には黒い Papua（パプア）人が居る。黄い Malay（マレイ）人鳶色の Polynesia（ポリネシヤ）人も居る。何れも未開中の未開人。而かも神的實在物や未來の信仰の聲が微かに聞える。其形式こそ賤劣であれ、祈禱もある。供犧もある。何れも祈らば聞かん、献げは受けん、の神の存在の信仰は人間在所不可拔である事を示して居る。

更に東方に向ては、兩米の二大陸を見る。此處にも古代宗教研究の材料は充滿して居る。不幸始めて行きたる歐人が集めたと云ふ傳説や神話の類を見るに多くは、當時の西班牙人の思想の影を宿し居るから、頼むべき材料とする事が出來ぬ。遺憾千萬な事である。Mexico（メキシコ）や Guatemala（グリテマラ）邊の怪しげな畫文字の畫も未だ明に讀解せられない。土人が土語で書いた類と雖も全くあてにならぬ。多くの警戒を要する。とは云へ、メキシコの Aztecs（アズテク）人やペルーの Incas（インカ）人の古代宗教は研究するに多大の興味あるべきは疑ない。夫から北の方へ向くと赤膚（レッドスキン）の土民が居る。彼等の消息は甚だ微かである。殊に數年前の出來事以來は所謂 Livres des Savages（リーヴル デ サヴージ）人の書）は再びとは得られぬことゝなつた。けれど赤色印度人の遺民は尚存してゐるから。彼等の朴素の信仰を知るのに材料として用ゐられる。彼等は其處へは Alentic（アレンチク）橋を渡りて行つたのであらうか、但しは亞細亞の母土を離れて島から島へとカヌー（うつろ舟）の上で風に送られてアメリカの地に着いたのであらうか、それは何れにせよ、夫れ以前即ち有史以前の人類移住の證跡は今日でも確に認められるのである。

こゝで亞細亞の大陸へ立歸る。と此地は彼の八大宗教占領の所ではあるが、夫れ以外の信仰も、或は表面に、然らずば、下層に流布して居て、若しくは流布して居たとが認られる。蒙古人のシャーマン崇拜(Shamanism)Finn(フィン)人及 Esthini(エストニア)人の半ホーマー的神話の類は卽ち夫れである。

かくどん〳〵と述べて來ると、學者は望洋の歎を免れぬであらう。材料の豐富なることは最早何人と雖否定する譯にはゆかぬ。唯問題は如何に是等を處理せば研究の目的を達し得べきかにある。答へて曰く Divide et impera(ディヴィデ エト インペラ)（分類せよ、さらば了解せられん）、然り唯分類あるのみ。學者を導く Ariadne(アリヤドネ)の捲(オダマキ)の糸は之あるのみ。眞の科學は分類を基として立つ。宗教の分類は不可能、と明に定まつたら、始めて宗教學も又不可能と云つてよい。地面を能く觀察し測量した上で、各自々々に部域を定みて開拓に從事したならば力の浪費なしに、成功の堂に上り得るであらう。

然らば如何に分類すべきや。先づ通俗に行はれて居るのは、眞宗教僞宗教の二つに分けるのだ。是は國語の分類に、自國語、他國語と別つの類だ。希臘人の分類には曰く、希臘人のと蠻人のと、猶太人のには曰く猶太人のと異邦民のと、印度人のには曰く、中華のと外狄のと。めい〳〵勝手の熱を吹く。こんな分類には科學的價値のあらう筈がない。

次には天啓的宗教と自然的宗教とに分つ法だ。然るにバラモン教の眼からは自分は天啓的で、佛教は自然的と見える。が其バラモン教も同教からは、自然的と見える。廣く研究して見ると、凡ての宗教が何れも各自を以て天啓的と見て居るやうだ。基督教猶太教は云ふ迄もない。バラモン教に至りては實にひどいことを唱えて居る。曾に韋陀は天啓だと云ふに止まらず、有史以前否、世界存在以前に其起原を有てゐると云ふ。

佛教とても這般の臭氣は全く脫してるとは云へない。後世の佛典中には釋迦は天啓的眞理を授かつた樣に書いてある（拙著古代梵語文學史三八頁參照）。勿論釋迦自身はNamma（ナンマ）やZoroaster（ゾロアスター）やモハメッド等の如く神の靈に面謁したやうなことは云はない。況んや韋陀詩人の唱ふる如き大言をや。釋迦は自ら「唯我獨尊」と云つて天下に我より偉なる者賢なる者なしとして居る、さればこそエーダの諸神さへ彼に奉仕して居るのだ。彼は吾人の所謂內的光明（インナー、ライト）を尊奉して居るのだ。彼始めて四諦を說くや。曰く。僧よ、此等未曾有の敎理に達せんが爲めに、我內に眼と知と智と明覺（ヴィジョン）と光とが開けたり（直譯）と。彼は直弟子等にSarvajna（サルヴジュナー）一切知と稱せられて居る。けれども彼も或事柄に付ては其時代の語を語りつゝあつたので。地球の形狀、天躰の運動に關する彼れの說は全く間違つて居る。それで後代になつて、其誤謬が發見された時佛敎學者は其所謂「一切知」と矛盾するのを見て、一切知とは唯々主要なる敎理に關してのみ然るのであると制限を附けて、只此等の範圍內に於てのみ彼れの言說は無過誤（アプ）であると唱へた。勿論是は後代の見解であるが、佛敎學者の卓見には感服の至りだ。Milinda Pracna（ミリンダ、プラシュナ）（那先）が已に此種の思想を告白して居る。彼はミリンダ王の問に答へて曰ふには、然り大王よ、佛は全知なりされど凡ての時其全知を用ゆるにはあらず。彼が一切を知るは冥想によりて其知らんと欲する一切を知るなり（直譯）と。此言は、感覺や理性で知り得らるゝものと、冥想によりてのみ知り得らるゝものを截然と區別したのである。彼は、感覺や理性の範圍內に於ては佛の全知若しくは無過誤を主張しないで、只冥想によりて知らるべきもの卽ち吾人の所謂「信仰事」（マッダー、オフ、フェース）に關してのみ之を主張したのである。

さて自然宗教なる語は其意味が一定してゐない。十八世紀の哲學家は之を恰も普遍文法（グラムメール・ゼネラール）の如く、奇蹟、怪譚、敷衍、細説等を加へざる而して凡ての宗教に必要且通同なる宗教的原理の一束」と解して居る。所謂宗教的原理とは、即ち神の存在、共萬能遍在、全知、永久性、自存、靈質、善良を云ふ。人によりては之に「唯一なること」「人格的なること」の二を加へてる。凡て是等は理智によりて發見し得られるものだそうな、Diderot（チデロ）が「凡ての天啓的宗教は自然宗教の異端なりき」と云ふた其自然宗教とは上述の意味での夫れなのだ。

然るにかくの如き意味の自然宗教とては古來嘗て眞に存した事がない。かの普遍文法と同樣哲學者腦中の產物に過ぎぬ。が今先づかゝる空想產物を普遍的原初的天啓と見て其宗教を原始的或は自然宗教と名けるとすれば、他に別に、墮落宗教或は偶像教と通常の天啓教との二類があるから、都合三種となる譯だが、此の如きも採るに足らぬ。已に確定した宗教或は言語を殊更に特別の人間にのみ示すやうなことは、神樣には似つかはしき仕業とは思へぬ。寧ろ神樣は只其素質を人心の中に植ゑ置かれたので、夫れが後に開展したのだと見る方が穩當らしい。蓋し不思議なものは大人よりも小供、樫木（カシノキ）よりも團栗（ドングリ）、動物よりも細胞である。彼等は後來開展の素質を藏して居る。

右の說は毫も史的根據を有せず全く採るに足らない分類法だが玆に、又國民的宗教と個人的宗教とに區分するのがある。其創立者の名は其信徒も知らず吾人にも知れないと云ふやうなのを國民的宗教。創立者の名、少くとも創立者と假定されたる人間の名を冠つてるのを個人的宗教として居る。例へば古のバラモン教や希臘人、羅馬人、チウトン人、スラーブ人、ケルト人、等の宗教は國民的宗教（モーゼ）で、摩西教ゾロアスター教、

佛教、孔教、老教、基督教、モハメッド教などは個人的宗教である。

此分類は便利な點はあるけれど、批評的精神に協つてゐない。成程バラモン教徒や希臘人や羅馬人に各其教祖、詳しく云へばインドラ、ゼウス、ジユピターの存在を教えてくれた最初の人は誰であつたかと尋ねても決して答へ得まい。けれども斯學の研究者は此等のアールヤ族の諸宗教に個人の精神若しくは或學派が興へた感化の跡を認むる事は容易である。又翻つて個人的宗教に就て見るに其創立者自身は、何れも皆、我唱ふる所は新説にあらずと主張して居る。孔子は「述而不作」と云つて居るし、釋加は「我は過去の七の師佛の一後繼に過ぎない」と云ふてるし、耶蘇は「我は律法及預言者を破らんとて來りたるにあらず、之を充さんが爲なり」と云つてるし、モハメッドさへも「我教祖はAbrâhim（アブラーヒム）即アブラハムである。我はMoslim（モスリム）人で猶太人でもなく基督教徒でもなく、唯Mekka（メッカ）



市に堂を建てたる者のみ」と唱へた。（スプレンゲル氏マホメッド傳三巻四九頁、四八九頁、コーラン三章六節、'Coran' III. 6 參照）それで、幾何が果して始祖の創唱に係れるか、古説なるか、はた、弟子等の附加なるかを確定しやうとしたとて、それは到底不可能である。且つ如何なる宗教でも其眞の力と支へとを得るには必ず人心内に或地盤をつかまへなければならぬのであるが、かゝる地盤が一度び見出されると、個人的宗教は容易に發展して宇宙的宗教（ユニヴァーサルレリジョン）となる傾向がある。（キウエン氏ヒッバート講義集中「個人的宗教と宇宙的宗教」'Hibbert Lectures by Kuen. 1882 'national Rel. and, uni versal Rel.' 參照）

次に尚一つの分類法がある。是は多神的、二神的、一神的と分けるのである。成程、宗教の主要點は人間以上の有力物、卽ち神に對する信仰如何に存するのであるから其宗教の奉ずる神の性質によりて分類するの

は頗る當を得たる觀がある、そして、此分類は便利な所もあるけれども神の數だけを標準にするのはをかしい。之れでは神の數は同一でも他の點に於て非常に異なつてる宗教が同類に組み入れられる事になる。不都合な事だ。且つ、別に單一神教 Henotheism（ヘノティズム）と無神教の二目を置かねばなるまい、單一神教と云ふのは、どんなものかと云ふと、之れは多神教と同樣に數多の神を信じてはゐるのだけれど、禮拜及祈禱の際には、其中の一つの神だけが信者の心を占めて居て、其神は其余の神とは全く別なものとなつて居るのである。此類は古韋陀詩人の宗教には著しく見える。神は數多あるけれど、一定の上下の位が付いてるてはなく、其中のどれでもいゝ、唯其際の自然界の狀況や信者の渴仰如何に應じて、或は空の神インドラ、或は火神 Agni（アグニ）或は古の天穹の神 Varuna（ワルナ）かどれか一つの名を呼んで之を拜む其時はその神を最上神として讃美する、とは云ふものゝ、他の神々を從屬の者又は除け者にするとの心組でもないのである。こうゆふ風の崇拜を單一神教と云ふ。之は多神教の始まり口には、常に見られる所で、別に一つの目を立てゝ置く價のあるものだ。

又、無神教と云ふと、苟も宗教として無神などゝは不可能の樣に思はれるけれど、佛教の如きは其原始に於ては眞に無神教であつた。釋迦はエーダ諸神の存在を否定して居る。又基督教に於ても其起る直ぐ前に、高尙な道德を唱導した人々は諸神は唯の幽靈（ファントム）だとして居る。

次回の講演には、宗教の科學的分類は言語の分類と同樣にせなければならぬ理由を、言語、宗教、及國民と此三者相互の關係から論證しようと思ふ。

# 第三講

（千八百七十年三月五日）

有史以前と迄は泝らなくとも、少くとも人種時代（Ethnic period）に於ては、人類の活動は普遍的のものであつた、個人的でも黨派的でも、はた、國家的でもなかつた、而して國民即ち言語、言語の地圖即ち國民の地圖であつたと云はれてゐる。然れども宗教と國民との關係は言語と國民との關係よりも更に緊密な者である。私しは親しく氏の此講演を聞いて感服した事があつた。

と唱導したのは Schelling 氏である。

蜜蜂は其奉する所の女王蜂が異なるので、從つて異なる群團ができてくると同樣に、人間も異なれる君王や政府の下に集まるから、異なれる國民を生ずるのだと云ふ說がある。けれど夫は間違つてゐる。丁度あべこべだ。同一政府の下にあるのは國民が同一だからだ。因果を顚倒してゐる。之は、爲政者の野心などの爲めに國亂が起つて國民の統一が阻害せられる場合のあるのでもわかる。或は又血統の同一が國民を作るとする者もあるが之もいかない。血液を同ふすると云ふ事は或は一家族、一部族一人種を形成る事もあらうけれども一つの國民を作成するに必須なる、高潔なる道德的感情—愛國心—を產み出すとはできない。

蓋し一國民を作成する所のものは宗教と言語とである。併し其力は宗教の方が優つて居る。北米の野蠻人等の言語は、もと同一言語から分れてできた方言（ディアレクト）Dialect であることは明かに知り得られる。然るに彼等が嘗て一國民であつた形跡は認められぬ。之に反して、希臘人を見よ、イオリヤ語、ドリヤ語イオニヤ語など各地々々其言語を異にし殆んど相

通ぜざる程であつたのみならず、多くの共和國（レスプブリック）に分れ、戴く支配者も異なつて居た時代でも彼等は堂々たる一大希臘國民であつた。何が故であらうか、曰く彼等は皆同じくドドナの古ゼウス、卽ち全希臘（パン・ヘレニック）のゼウスを信奉してゐるからだ。之が爲に彼等はよしや國を異にし言語を異にし政府を異にするとも理想的には皆同一躰のものであるとの感情が深く〳〵彼等の胸中に横はつて居て不可抜ものがあつたからである。

また猶太人を見よ、彼等の言語はフェニキヤ人、モアブ人 Moabite などのとは別ではあつたれど、希臘人の諸言語の相異なれるほどには、互に異なつてゐたのではない。然るに猶太人は Yahveh（ヤーウヱー）崇拜を固守してフェニキヤ人の神 Baal（バール）及 Ashtorth（アシュトレト）、モアブ人の神 Chemosh（ケモシュ）を拜することを頑然として拒むだが爲めに、遂に此等三人種の合同を見るに至らなかつた。Israel（イスラエル）國民ができたのは全く頑固なる Iehovah（ヤーヱー）に同じ）崇拜の結果である。

ロシエリングの曰く、國民は其神話の確立したる時始めて成立す、神話の起原は國民の確立以前にあらざるべからず。國語も亦然り。國語の確立は國民の確立と同時なりと。（神話哲學講義一卷、一〇七頁）ヘーゲルは哲學上シエリングの敵であるけれども此事に關しては同一の結論に達して居る。曰く一國の基礎を作すものは神の觀念なりと（歷史哲學）

上述の說は獨り哲學者のみならず歷史家特に法律家も又認めて居る。皮相から見ると法律が國民を團結するやうに思はれるけれど、其法律は共權威勢力生命を宗教から授かつてるのだ。Manu（マヌー）の法典に付て、Maine（メーン）氏は、「法律は神の定めたものであるとの思想は近代的である」と云つてゐられる。それはそうであらう。けれども、立法者は通常の人民よりも一層神樣に親近なものであると云ふ考へは、何處の古傳說に於て

も見られる。Diodorus Siculus の云ふ所によれば、埃及人は其法律は Hermes 神が Muevis なる者に授けたのであると信じ、Creta 人は Minos 王は Zeus 神から其法律を教えられたと信じ、Lacedomonia 人は Lykurgus は其法律をアポロー神から授つたのだと信じて居るとの事だ。又 Arian 人は其立法者 Zathranstes は善霊より教えられたとし、Getae 人は Zamolxis は女神 Hostia より教はつたとし、猶太人は摩西は Jao（エホバに同し）から授かつたとして居る。

併し古代に於ては宗教は人類の生活及社會制度の上に多大の感化を與へ引離すべからざる關係をもつて居たとの説をメーン氏程に力を入れて唱導した人はない。氏の云はれるには、家族が單位で、其が集まつて氏 Gens 即ち門をなし、氏が集つて部族部族集まつて國家をなす。家族は家族の竈 Sacra によりて保たれ、氏には氏の竈、部族には部族の竈國家には國家の竈があつて、各夫によりて保たれて居た。外國人は先づ竈に近づくことを許されて後始めて歸化することを許された。法律が宗數から離れた後でも、竈は第一の祭壇で、父は第一の長老で、而して、妻子や奴隷も竈の周圍に集まつて居た。竈は即ち聖なる火を燃す處で、其家保護の女神であつた。後には夫れが國の女神ヘスチヤとなつたのだ。現今に於ても婚姻の儀式なんどには往々古代の宗教的痕跡を存してるのがあると。

今茲で一寸尋ねんければならぬ事がある。上に宗教々々と云ふて居るのはどんな意味の宗教であらうか、と尋ねて見ると、人間の心内に潜んでゐる一つの力としての宗教ではない。記し得べき外面的發表としての宗教である。即ち若干の神の名や物質的意義を脱して精神的意義を有する様になつた若干の形容語―例へば物質的意義での力、光、清潔、

を言ひ表はして居たのが偉大、善良、神聖を意味するやうになつた語―さては、供犧、祭壇、祈禱、功德、罪惡、肉體、心靈なんど云ふ若干の專門語等を一括して之を指して宗教と云つてゐるのだ。此等の者は原始宗教の外面的骨格である。吾人若し宗教を單に是等の外面的發表と見る時は、宗教は只、神聖なる一方言（ディアレクト）に過ぎないことゝなる。すると、原始の宗教と原始の言語と如何に密着の關係があるかが知れる。宗教は殆んど全く言語に依屬して居ることがわかるであらう。

之に依つて之を見れば宗教の分類は言語學上の分類と同一なる時始めて妥當なることが知れる。原始の言語に就て云ひ得られる程の事が原始の宗教に就ても云ひ得られるやうだ。

暫らく言語の事に就て御話しやう。

先づ眼を歐洲及亞細亞とにつけて見渡して見ると、原始の言語は茫々として混沌不定の狀態にありて恰も砂漠の如くである。其言語の砂漠の內に三箇のオーシスがある。此等の三中心の名をツラニヤ語、セム語、アールヤ語と云ふ。人類の言語は此等の三中心（特に二中心）に於ては夙に固定化して自然的言語が史的言語となつたのである。私は此集中固定は政治及宗教からの感化の結果だと主張する者である。今彼の三族の言語と宗教とは互に相伴ふて固定化した事を證明しやう。

抑も支那語はツラニヤ語の第一の代表者であることは論がない處で支那の宗教を見るに無彩色非詩歌的で、單綴音（モンシラビック）的とも名け得べき底のものである。其崇拜する所は空、太陽、電光、風、山川等を表示せる無數の靈（スピリット）である。此等の靈は柘互に關係もなく、其間に統一もなく雜然として群居して居るのである。又之の傍に死者の靈としての祖

先祟拜がある。祖先の靈は人事を豫知し、在世の人間の行の善惡に應じて吉凶禍福を引き起すとせられて居る。要するに古代支那宗教の特質眞髓は人間及自然の二種の靈魂崇拜であつて、現今でも尙行はれて居る。但し上層社會には半宗教的半哲學的の二元論的信仰も存在して居る。所謂二元とは哲學上には形式（フォーム）と實質（マター）、倫理上には善惡、宗教及神話上には天地と名けられて居る。さて支那の古代宗教を知るには孔子の著書による外はない。彼は新說を唱へたのでなく、古教の說述者に過ぎないと自ら云つて居る。曰く傳ふるのみ、新しく作るにあらずと又曰く、古を信ず、故に之を愛すと（レッグ氏孔子傳九六頁 Legge, 'life of Confucius' ショット氏支那文學七頁 Schott, 'Chinesische Literatur' 參照）

次にセム族を見る。バビロン人、フェニキヤ人、及カルダゴ人の宗教は何れも多神教で猶太教、基督教及回教は一神教であるが、夫れ等孰れに



通同の若干の神名がある。其等の名はよく彼等の宗教の特徴を示して居る。勿論、其言語に於て、其文學に於て其開化に於て、其時代に於て、かほど迄に相異れる諸種族を包括して、一言の下に其特質を云ふことは頗る至難であるが試みに強ゐて之を云はゞ、歷史に於ける神の信仰、精しく云へば神は自然力を支配するものなるが故に之を崇拜するのでなく、個人、種族、國民等の運命を左右する者なるが故に之を崇拜することで、あるセム族の諸神の名は大抵、道德的性質を表はした者である。例へば「強き者」（ゼストロング）「高く揚れる者」（ゼ、エキスハルテツド）「主」（ゼロード）「王等」（ゼ、キング）而して何れも確固たる戲曲的個性を持つては居ない。夫故に容易に相合同する傾きがあつて、單一神教から一神教へ移るのに苦勞がない。殊に其拜する場所は單調なる大砂漠であるから、かゝる傾向は最も生し易かつた。此他尙一つの特徵とも云ふべきは、セムの宗教は女性を容れざる事、若し女神ありとせは單

に、太古の無性の神の能働力の表示に外ならぬ事である。但し之れは凡ての神名に付て然りとは云へない、若干の例外はある。セムの宗教は何れも殆んど本能的に唯一神的なりと云ふたルナン（Renan）氏の説にも制限はいるが私の説も夫位の程度の制限はいる。

最後に、アールヤ族を見ると、印度の谷や獨逸の森で拜まれて居た神名は何れも自然力の表示である。が決して天然崇拜ではない。短く云つて仕まへば、自然に於ける神の崇拜である。精しく云へば人心の奥底に潜める者としての神でなく、自然界てふ美裝の後に現はるゝ者としての神を崇拜するのである。且つアールヤの諸神は何れも確固たる個性を具へて居るのが其特徴である。故に一神教へ移るには劇しき抗爭が起る。偶像破壞騷動（イコノクラスチック、レヲリユション）か但しは哲學上の失望か、何れかなしには濟まなかつた。

以上三族の宗教は其言語と同じく人類の運命を定めた所の史的事實である。吾人は自ら吾人の言語、思想、宗教に於て現に之を感じつゝあるのである。

㈣然れども、此等の三大先驅者が後に見殘したる混沌は全然的混沌のまゝではなかつた。言語の本流は此等三大支流を分れ出でしめたる後も尚ほ引續き進行した。本家の聖焔は、此等三祭壇に點火した後も、全く世界何處に行くも宗教と言語との存せざる所はない。只夫等は自然的は滅盡しなかつた。煙や灰に埋もれはしても微かながらに薫（いぶ）つて居る。野生的發育をして居るのみで、歷史を有つて居ない、又歷史を殘してもゐない。故に彼の三者と等しなみに科學的處理を施す譯にゆかないばかりである。

然るに此處に疑問がある。何故に此等三個以外（寧ろ二個以外と云ふ

べし、何となれば支那語が南北兩ツラニヤ語の中心であること、精しく云へば、原始の混沌言語は北方にはTunguis（ツングイス）語、蒙古語、Finn（フィン）語と分れ、南方にはTaic（タイ）語Bhotiya（ボチヤ）語Tamalia（タマリヤ）語と分れたが其最初に固定したのは支那語であると云ふ事は尚未だ證明された譯ではないから其證據が出る迄はツラニヤ族は嚴密には一つの族（ファミリー）とは云はれぬのであるに於ては固定化がなかつたの乎と怪しむ人があらうが其理由は簡單である、曰く此等の三は言語發達の例外に屬するもので決して常例にはあらず、否あるべからず。人間の言語が其野生的盛衰の狀態を離るゝことはあり得べし、離れざるべからざるにあらず。其可能はあり必然的にはあらず。若しもセム、アールヤ、ツラニヤ族の祖先等が純乎たる自發的（偶然的）作用を以て固定化を行はざりしならば凡ての言語は蜉蝣的で、唯一時一代の需用に應じて盛衰起滅し恰も水上の氷片の如くであらう。

若し然かりしならば言語の概念は今日の吾人の持てる夫れとは甚だ異なれるものであらう。然るに今例外から作り出された概念を自他にあてはめて見て、何故に、他も又かくの如くならざるやと怪む、是は恰も凡ての動物が家畜化されてないのを見て怪しんだり、庭園内のアヂモヂの花を見て居た眼で、野や谷に滿てる野生のアヂモヂ異樣なるに驚くと同樣だ。

ツラニヤ族に於ては原始の集中化は他の二族に於けるが如くに强固ではなかつたから共諸部の間には、ヘブライ語、アラビヤ語、希臘語及梵語間に存する如き緊密なる關係を見出し得ぬ。けれども夫等の間には散在的（スポラヂック）の一致と大躰の構造上の類似があるから、太古には集中化があつたと假定せんければならぬ。北方ツラニヤ語卽ち、匈奴語、Lapponia（ラポニヤ）語、エストニヤ語、フイン語には一致點が十分ある。南方のには夫れ程の

證跡は少ない。少ないは少ないが、夫れでも原始の同一を立するには足りる。南北兩ツラニヤ語を遡れば支那語に歸一する。近頃 Edkins（エドキンス）氏は、支那語は滿洲語蒙古語の根元なると同時にシャム語、西藏語の夫れでもあると證明した。

Bunsen（ブンセン）氏は、ツラニヤ語に付ては他の二語と同一には論ずべからずと云ふて、私の說に反對せられた。けれども、進化說はダーウインが再說してから以來、自然科學にも言語學にも適用されて居る。全人類には共通の祖先があると假定しても不都合はない、何ぞ況んやツラヤ語にも他族のと同一樣の關係が存して居ると假定したとて不可あらんや。

さて、今亞亞細を去りてアフリカを見やう。アフリカの言語にも一定の集中がある。近時の比較研究によると、赤道から Keiskamma（ケイスカムマ）迄の間の言語（Kafir（カフアー）, Setchuána（セッチナーナ）, Damara（ダマラ）, Otyiherero（オチヘレロ）, Angolo（アンゴロ）, Kongo（コンゴー）, Kinsuahéli（キンスナヘリ）等の諸語）は正式の Bântu（バンツーヂャレクト）語に於て集中して居る。（Bleek（ブリーク）氏「南アフリカ語の比較文法」二頁及「ブシュマン語の研究報告」參照）此等のバンツー或はカフアー語の一團の北方には Berber（バーバー）語と Galla（ガラ）語とがある。是はセム語の一部的固定である。其南方にはホッテントッツ及 Bushman（ブシュマン）の二方語がある丈だ。Th. Hahn（ハーン）博士によると、此二方語は密着なる關係を有つてるそうだが兎に角、此等の南方語と埃及語との間には眞の類緣があるのであらうか。此等は元は同一であつたのにカフアー族侵入の爲めに分裂したのであらうかは今後の研究問題であるが、要するに古埃及の言語及宗教は古アールヤ及セムの夫等とは獨立にナイル河地方に於て集中化したものである事は慥である。

アフリカの言語の原始的姿形は大體ながら推知し得られるけれど、アフリカの宗教の盛衰に關しては殆んど全く消息を缺いてゐる。殊に

同教と基督教の進入の爲めに、大抵の所では、古へ、の諸神の遺跡が破壊されてしまつた。近頃は宣教師や旅行家が Nut（ヌト）やホッテントットの宗教に關する記述を出して居るが、其多くは極めて近時の信仰に關する報告で、而かも嘲笑的に書いてあつて、眞面目な態度のは稀である。殊に、「宗教の起源は呪物崇拜にあり」といふ說が彼等の先入見となつて、彼等の眼を盲にしたと見えて呪物崇拜以外の信仰に關しては何事をも記して居ないのが多い。遺憾な事だ。

亞弗利加の宗教の中で、文獻の徵すべきものを有（もつ）て居るのは、只埃及の夫があるのみだ。埃及の宗教は羅馬人や希臘人にも吾人にも久しく謎であつたが近頃は研究が大に進んだ。一見した所では埃及の宗教程混雜紛糺を極めてるのはない。一方には賤劣なる動物崇拜があるかと見ると、同時に他方には高尙な神秘的思想がある。かゝる奇異なる對照は輓近の研究も尙未だ十分に說明し盡すことができないけれども M. Le Page Renouf（ルパージ・レヌフ）氏の Hibdert（ヒバート）講演集を讀むと、埃及の宗教にも、アールヤの夫れと同樣に、宗教思想の一定の發展があり歷程があることを感じずには居られない。

埃及の宗教は初發から、只の動物崇拜であつたのではない。動物崇拜は埃及宗教の衰頹期に起つたので、神話中の象徵（シムボル）から導き出したのだ。元來は埃及の神話はアールヤの夫れと同しく、宇宙の法則秩序（日や月の出沒等の如き）を基礎にして居たのだ。埃及語の Maât（マート）は梵語の Rita（リタ）と同樣に、元とは物質的の順序の意味であつたのだが後には道德的秩序の意味になつて居る。埃及の神話は大抵太陽を元としてあるらしい。併し其中の諸の自然力以外に一大力者―全宇宙の物界並に道德界を支配し、各個體の運命を左右する―をも甚た早くから認めて居る。後世に

なつては死者も崇拜された、之れは不朽なる新生命の始めと云ふ考からきてゐるのだ。さなきだに言語の疾病なる神話は埃及に於ては藝術の發達の爲めに膨脹せられて、奇益々奇、怪益々怪となつた。埃及の最初の神には堂はなかつた。(印度に於て Para-Brahma〔至高の梵〕には社がなかつたのと同じである)のみならず、其像が「石に刻された事もなく」「畫かれた事もなく」「其住所は未知で」「供犧もなく、從者もなかつた」のである。然るに後世になつて、かゝる事は一切忘れられて、Memphis, Heliopolis, Abydos, Thebes, 卽 Dendra なんど國中至る所に堂が立てられ、祈禱、供犧も盛に行はれた。けれども「神は一躰」との思想は印度に於けると同じく始終一貫して保存されて居た。「自存の者」とか、「自ら生々する者」とか、「一」とか、「一の一」とか、「第二のなき一」梵語の Svayambhû, ekam advitîyam に同じ)とか、「萬物を作りたる、而も自らは造られたるにあらざる最初の者より生々するを始めたる者」などの言辭は埃及の宗教書中には不絶見らるゝ所のもので、何れもどれかの神を呼ぶ際、單一神教的に用ゐられたのである、Ra 神は元は太陽で、其父は諸神の父なる Nu 神である。而してラー自らは Shu(空氣)及 Tefnut(露)の父であつて、地上の最高神とせられて居た。Osiris 神は Seb(地)と Nut の中にできた五子の中の長で、父よりも大に、母よりも强しと云はれ Isis の夫で Horus の父であるが、此神は暗黑(Set)の打破者としての太陽の性質を表示したものである。又ラーはオシリスの魂で、オシリスはラーの魂だとも書いてある。Thot は月の表示で、地の測量者、時の分配者である。後代には文字、技術の發明者とせられた神樣だ。ルヌフ氏の曰く、一埃及語を知らざる埃及學者は或は此等に種々異なれる名を負はすことあらん。然れども比較神話學者はそがアールヤ神にてあれ、はた、埃及神にてあれ、

其各に於て忽ち眞の名を指定するを得るなりと。言や眞なりと云ふべきだ。

茲に Mariette（マリエット） 氏の言を引いて終を結ぼう。曰く、埃及神團の頂上には、唯一の不朽の、造られたるにあらざる、見るべからざる。自己本質中に奥深く潜みたる神あつて坐せり。彼は天地の創造者なり。彼は存在せる凡てを造れり。彼によりて作られざりし者とてはあることなし。彼は奥義許されたる者の神なり。然れども埃及人はかゝる崇高なる思想埒内に長く止らんことを欲せず又止まる能はざりしなり。彼等は世界、其形成、其原則、人間及地上の運命等を以て、唯一實在が唯一役者として演ずる大戯曲と觀し、凡ては彼より來り彼に歸入すとせり。而して彼には數多の使者あり。此等は皆彼れの屬性の人格化にして形見るべく、力に限あり、但し其力と性質とは彼より分與せられたる所なりと。

次にアフリカを去つて、アメリカに行くと先づ、北米に於ては太古に移住のあつた證跡と見るべき幾多の言語が傳はつて居る。けれど宗教に關することは毫も分らない。南米には二個の政治的及言語的中心がある。メキシコとペルーとには奇怪なる宗教的傳說の躰系をなしたのがある。

最後に、アメリカからマタガスカル迄の間では、其邊の諸島の言語中に通同なる者を採り出して夫れを材料にして研究すれば、原始的ポリテシヤ語が殆んど組立て得られるのであるが之と同じやうにして、原始的ポリテシヤの宗教も今日では段々と明かになてゐる。

宗教學には言語學に比すれば一段の利德、之を利德と云ひ得べくんばがある。何かと云ふと、言語學上の斷案は、材料が不充分な爲めに下し難いやうな場合には、宗教の方では、そんな材料は不充分處でなく全然

皆無であるからどんな勝手な假定説でも立て得られることである。原始語が轉訛ながら、尚微かに行はれて居る所でも、古への堂宇は既に全く湮滅去りて跡を留めず、古き神名も聞き得られぬのである。

とは云ふものゝ宗教學者は言語學の研究法に倣つて、先づ指をアールヤ及セムの宗教の比較研究に染むるが最もよいやうである。アールヤ語の中にもセム語の中にも、主要なる諸神の名、祈禱、供犧、祭壇、精靈、儀式、信仰等宗教の要素を表示する語は隨分多く保存せられて居る。此等の者の説明を先づアールヤ語の方でやつて見て、夫れが成功したら、次に同一の方法でセム語の方でもやつて見るならば、必ず同一の關係が、其何れの中にも存して居ることを發見するであらう。セムがすんだら同じやうに又ツラニヤをも研究する。

そこで先づ、アールヤより始める事にする。佛蘭西、以太利、西班牙語等所謂羅馬方言（ローマン、ヂヤレクト）が、こういくつにも分裂しない時分は唯一つであつた。それは羅甸（ラテン）語である。幸にして、羅甸語は吾人に傳はつて居る。併しよし之が傳つて居なかつたにしても吾人はかの諸國語に通同に保存せられて居る多くの語から推究して行くならば、分裂以前の文化の狀況を察知することが出來る。例へば夫れ等の諸國語の中に「王」「堂宇」「宮殿」「船」「馬車」「大道」「橋梁」など云ふやうな高等なる文化生活に屬する物件を表はせる語が共通に保存せられて居るのを見れば分裂以前に於ける彼等の開化狀態が知れる。之れと同様にして、希臘語、羅甸語、梵語、さてはスラーヴ語、ケルト語、チウトン語等に「家」の原始語が共存して居ることから推究すると、彼等は其分裂以前、少くとも印度の Manu（マヌ）や希臘の Agamemnon（アガメムノン）より千年前に於て既に天幕住居の域を脱して居た事が分る。又「王」なる語も共存して居るから、當時既に君王政治やうのものが成立て居た事が

知れる。

1、家は梵語 Dama, 希臘語 δομος, 羅甸語 domus, Gothic 語 timrjam. 語 Slav. 語 dom

2、王は梵語 Raj, rûjan, 羅甸 rex, Goth. reiks. 愛蘭 rioġh

余の事はさて置き、至上神の名を調べて見るに、印度、以太利、希臘、獨逸等諸語に通同なのがある。夫れは Dyaus (チヤウス), Zeus (ゼウス), Jovi-s (ジョビス), Tiu (チウ) (國名順)である。此等の名は私(ワタシ)の眼には只の名と斗り見ゆるのではない、史的事實として、それがあり〳〵と現するのである。此等の名を誦すると、ホーマーやエータより數千年以前に於て、唯一の不可知的實在が、其類語中の最美最良最高の名―光及空―の下に拜まれつゝあつた事を目睹するやうな感じが、私にはするのである。

云ふ事なかれ、是只の自然崇拜、偶像崇拜に過ぎざりし者にあらずやと。ヂャウスとは單に青空、若しくは青空の人格化でない、夫れよりもより多くを意味して居る韋陀では Dyaus Pitar (ヂヤウス ピタル) 希臘では Zeus-pater (ゼウス パテル) 羅甸では Jupiter (ジュピター) と云つて同じく共に天父の意味である。嗚呼此語は私の眼には最古の詩集である、人間最古の祈禱である。ポリネシヤ語や Melanesia (メラネシヤ) 語の中に神に向つての祈禱の語のあるのを見る時、私は嗚呼是こそ最初にエルサレムに於て唱出されたものであるかと感しずには居らないのである。が、此處でも夫れと同樣の思をなすのである。ホーマーや Ovid (オヴィド) によりて、口喧(ヤカマシ)き夫或は不貞の戀男のやうに忌いましく描きなされて居るけれど此 Jupite (ジュピター) なる名の背後には神聖なる記錄が潛むで居るのである。

抑もアールヤ族が四方に分散して以來、茲に星霜を經ること幾千年其間に學術は興起し技藝は進歩した。けれども、無限者を稱するの最好最愛なる名は最古の祖先が用ゐて居た者より外のものを發明するこ

とはできなかつた。「天にゐます我等の父」とより外の言葉は出て來なかつたのである。

次にセムの方を窺ふて見るに、或は、彼等諸族の言語は互に類似する事餘りに甚しいから研究の興味がないなどゝ云ふ人があるけれど、必しもそうではない。ブンゼン氏「基督教及人類」三卷二四六頁參照）私はルナン氏が其最初の企てに成功してヘブライ語、シリヤ語、アラビヤ語、Ethiopia（エヂオピヤ）語等は申すに及ばず古代の Poenia（ポエニヤ）語、バビロン語、Nineveh（ニチゲー）語等をも網羅せる比較文法を出されんことを望むのである。ボップ氏のアールヤ比較文法と好き對（ダヴィ）であらう。

セム諸族に於ける本來の同一語と、後に他から採り入れたの（例へはアラビヤ人がアラメヤ語から）とを區別することは、セム諸族は久しき間相接觸交通してゐたから、隨分困難であらうけれども聲音學上の法則から推していつたなら不可能ではあるまい。

若しも彼等諸族の語の中に、父、母、息子、娘などのみならず、養父、養母、養兄弟等いふ名稱が共存して居る處から彼等の社會制度の發達を推考するならば、モーセの立法以前に於て彼等は已に或文化程度に達して居た事が知れる。なんかも一寸面白い、

が、そんな事は却說置、本題の宗教の事を研究して見ると、南方卽ちアラビヤ、北方卽ちアラメヤ、中部卽ちヘブライの諸國語に共通の神名がある。夫れから推考すると、彼等が分派以前、卽ちアブラハムが只エホバ神のみを拜み居り、フエニキヤでは專ら Baal（バール）神、バビロンでは專ら El（エル）神が拜まれてるやうな事になる前には、諸族皆同一の神を拜してゐたのらしい。今夫等の神名を調べるならば古代セム族共通の宗教思想を知ることができやう。

彼等の神名は、アールヤの夫とは違つて、大抵「力ある者」とか畏敬すべ者」とか「高く揚れる者」とか「王」とか「主」とかいふやうな意味を持つて居る。一寸見ると是等は尊稱に過ぎないやうな氣がする、尊稱と見れば彼此同一のがあつたとて不思議はない。處が同一の名稱が固有名詞としてシリヤ、バロン、カルタゴ Palestine（パレスタイン）等の神名に使つてある。然らば此處に出來得べき説明は唯一つあるのみ。卽ち神の名が確定した一時期があつたので、そうして、夫れは彼等各自の宗教及言語の確立以前にあつたといふ事である。

セム族の神名の最も古いものゝ一つに El（エル）と云ふのがある。「强き」と云ふ意味の語である、バビロンの刻文に Illu（イル）（神）又は Bab-il（ダビル）（il は門或は堂の義）と云ふ語があるが其中に含まれて居る。ヘブライでは此語は「强き」或は「英雄」の意味に用ゐられ又神の義にもなつてゐる。例へば Beth-el（ベテル）（神の家）ha-El（ハエル）（强者或は神）の如く冠詞付きでは舊約書には Jehovah（エホヴー）（眞神）に使つてある。併し El 丈けでは異國人の神にも使つてある。

此エル神はフエニキヤ人が Byblus（ビブルス）で拜んで居たもので「天及地の子」と稱せられた。（ブンゼン氏の「埃及」參照）。傳へ云ふ。彼は Elium（エリウム）の孫で、エリウムは野獸に殺され、次で其子が立つたが、廢せられ、自分の子のエルに殺されたと。Philo（フイロ）氏はエルは希臘の Kronos（クロノス）と同一の者で、Saturn（サヴルン）星の主神だとして居る Himyaria（ヒミヤリヤ）の刻文中にもエルの名は見えるし又最近時、アラビヤの固有名詞の中にもあることが發見された。但し神としてのエルの名はアラビヤでは遠の昔亡びてしまつたのだ、

フイロはエルは Elohîm（エロヒーム）（Eloah（エロアー）の複數）に關係があるとして居る。其説に、エルが父と戰つた時エルの軍勢は Eloem（エロヱム）と稱せられた、希臘でクロノスの軍勢を Kronoi（クロノイ）と云ふが如しと。是はホンの臆説である。Eleischer（フライシヱル）

教授は是說に反對して居られる。

Eloah（エロア）はアラビヤ語の Ilâh（イラー）（神）と同語で、單數ではエルと同語として聖書の中に使つてある。複數では普通の諸神又は僞神の意味となる。但し舊約書で眞神に此名が使つてある場合は複數形で、意味は單數なのである。アラビヤ語の Ilâhah（イラー）は冠詞なしでは普通の神の義、冠詞が付くと、卽ち al-Ilâh 或 all-ah となるとモハメッドの神の名となる。モーセ及アブラハムの神にも使つてある。

Eloah 或は Ilâh の起原に關しては本國アラビヤ人間にも又歐洲人間にも異說がある。Kâmûs（カームース）は曰く之に關しては異說二十ありと。Mohammed（モハメッド）El Fâsi（エル ファーシー）は曰く三十ありと。フライシェル氏は、El[1]（强者）の根語は al（太い、濃かい、强い）である。Elah 或は Ilah は抽象名詞で恐怖の義、其根語は alah（激される、混雜される、困まらされる）である。Eloah は恐怖の義より一轉して、恐怖若しくは畏敬の對象物を意味する事となり遂に神の名となつたのぢやと云つてゐられる。成程外にもその例はある、例へば「恐怖」てふ意味をもつてゐる *pachad* といふ語が舊約書では神と云ふ意味に使つてあるし（創世紀三十一章四二節。——「我父の神、アブラハムの神、及びイザヤの恐れ我と共にゐますにあらずは」又五章五四節「而してヤコブ、其父イザヤの恐れによりて誓へり）又アラメヤ語 dachlâ（恐怖）も神又は偶像の意味に用ゐられてゐる。梵語でも、梵天は「一大恐怖」と稱せられて居る（Kaṭha-upanishad. VI. 2 Mohad bhayam vajram udyatam yah）。

[1] Nöldeke（ネールデケ）教授は此根語は「前方に居る、率ゆる」を意味するとせらる。

Eloah 或は Ilâh は女性では Allât（アラート）となる。此はアラビヤの女神で其有名な堂が Taif（タイフ）にあつた。但し Mekkah（メッカー）の堂には劣つてゐたが、モハメットの命令で壞されてしまつた。併し此アラート崇拜は一地方に限りて行

はれたのではない。ヘロドッスの書中に Alilat とあるのは Koran 中の Allât と同一なることは疑はれない。

セム族の神で有名なのには、エルの外に Baal 或は Bel と云ふのがある。此神を猶太人は異國神とは思つて居なかつた。豫言者等は烈しく反抗したに拘はらず、エルサレムの林中で此神は拜まれて居たのである。兎も角、內國神同樣、少くも、セム族の神として扱はれて居たので。彼等の祖先が洪水以前に奉事して居た諸神中の高位を占めて居たものである。バール神は初は一つであつたが諸方で祭られた結果として幾多の分身が出來た。Baal-Tsur, Baal-tsidon, Baal-tars など云ふ神は元は Tyre の[1]バール、Sidon の夫れ、Tarsus の夫れであつたのだ。Malta 島で發見された二つの Candelabra にはフェニキヤ人が Melkarth 卽ち「チレのバール」に獻げた文が存して居る。バール神は Shechem では Baal-berith（契約の神）となり、Ekron では Baal-zebub（蠅の主）として Philistine 人に拜せられ、[2]アブ人及猶太人は Baal-peor と呼んで居た（フェニキヤの貨幣には Baal-shâmajîm とあり、Palmyrenia の刻文には Baal-shamen（天のバール）とある。バールシャメーンはフイロ氏の所謂 Beelsamên で、之を彼は太陽の事だとして居る。曰く、暑さ嚴しくなる時は古のフェニキヤ人は手を太陽の方に擧ぐるを習とせりき。是等は太陽を天の主なる唯一の神なりと考へたればなり。彼等は之を Beel-aamên と呼びき。卽ち是希臘のゼウスなりと、又 Baal-lim（多くのバール、或は諸神）てふ語も目に入ることがある。

1、士師記　八章三三、九章四節
2、列　王　一章二、三、及十六節
3、民數記　二十五章、三章

Ilah 或は Allah には其女神 Allât がある如く、Baal にも其女神 Baalt が

ある(アッシリヤ語では Biltu フェニキア語では Baaltis)。セム族の女神の觀念は最初に於てはアールヤ人の夫れと同じでなかつた。アラート やバールトは最初は單にアラー神やバール神の勢力、或は活動、若しくは集合力の表示に過ぎないものであつたので、決して一個の別の神ではなかつたのだ。少くとも「妻」を意味してたのではないらしい。それはカルタゴーの多くの刻文には女神 Tanit を「バールの面」と名づけてあるし、Eshmunazar の刻文には Sidon の Astarte はバールの名なりとしてあるので分る。(De vogüé 氏、Journal asiatique 1867. p. 138 〔亞細亞雜誌〕參照)併し此抽象的觀念は後、時を經て、女性の力及妻の觀念に變つてしまつた。

此他の女神に Asitoreth 或は Asitaroth (複數)と云ふのがある。其男神は Ashtar である。此名はバビロンの刻文では Ishtar となつて居る。いつでも女性の形で、天及地の皇后といふ意味である。Palmyrene の刻文及モア



プ人の石牌にも此名が見えて居る。此神は其の女性的の方面が秀でて著しくなり、カルタゴ人、フェニキヤ人、フイリス人のみならず猶太人にも拜まれた。(列王記、十一章、創世紀一四ノ五、)シリヤ語では Athara-thah と云ふ。Strabo 氏の所謂 Atargatis である。フェニキヤ人は Astarte と云ふ。此フェニキヤ名で此神は希臘及羅馬へ傳はつた。キューネン氏(イスラエルの宗教一卷九〇頁)によれば、元とは月の女神で、其崇拜の墮落しない間は處女力の表示であつたのだ。Jeremia が「天の皇后」と云ふたのは恐らくアスタルテか若しくはバールチスを指したのであらう。(エレミヤの書七の一八何となれば南アラビヤでも此神は拜まれてゐたし、又 Sana (ヒミヤリヤ王國の古の首都)には Venus の祠があつたし(Bait Ghundân) 又ヒミヤリヤの刻文には Atitar てふ名が(時としては男性で動詞が先だつてゐる)見えてゐるから。

る。元とは王の義であつた。此神はかのカルタゴや、Rhode や Crete 島のみでなくヒンノムの谷でも拜まれてゐた所の Moloch と云ふ神と同じ者である。アモン人の神 Milcom（其堂は Olivet 山に在つた、列王記二二ノ一三）も其轉訛である。又セファルブ人が自分の子を燒いて獻したと云ふ Adram Melech 及 Anammelech 神等は何れも此神の地方的分身である。（列王記一七ノ三一）

Adonâi はヘブライ語では我主の義、舊約書ではエホヴヮー神に限つて使つてある。此名はフエニキアでは最上神の名であるが後、幾多の變遷を經て、かの Adonis—Aphrodite に愛着されアレス神の猪に殺されるアドニスとなり變つたのである。

Elyôn はヘブライ語では最高者の義、舊約書では神の一寶辭になつて居り、又エホバ神の一名ともなつて居る。El Elyôn の僧（最高者の僧）は Melchizedek と名けられてゐる。エリョーンの名はヘブライに限らず、フエニキヤの開闢譚には Elium（最高神天父）となつて出て居る。Oppert 博士は此エリウムは Damascius の書にある Ilinus と同じものとして居られる。

Shaddai（烈しき者、力ある者）は聖書の中では大抵は單獨に、時としては El と結合して出て居る。シリヤ語で惡鬼の意味（Talmud の中でも同じ意味）の Shéd てふ語、及舊約書の中に僞神又は偶像の義に用ゐてある Shedim（複數）てふ語等と何れも同じ根語から來て居る。Vogüe 氏は埃及の畫文字の Set 又は Sed も同一名として居られる。牧者等が傳へた神の名の中にもある。但し Lepsius 氏は此說には反對で、シャッダイは古のフエニキヤ神の一つだと云ふ。

以上の神名はセム族分裂以前あつたものであつて、モアブ人のケモシユやアモン人のミルコンや、シドン人のアシユタロトなんぞは後に至りて地方に生したものである。（列王十一ノ五及七、士師記十一ノ二三及二四）

Jehovah（エホヴー）或は Jahveh（ヤーヴェー）（元はかく發音したのらしい）は猶太人固有の神名であると一般に思はれてゐるのであるが、Lydus（リヂス）氏の有名な文中にはIAO（ヤーオー）は Chaldea（カルデヤ）人の神名なりとある。IAO は Jahveh 又は Jah（Hallel-jah の内にある如き）と同一であると假定したならば、リヂスの所謂カルデヤ人とは單に猶太人と云ふ程の意味であらうか。如何であらう。アッシリヤの刻文に Jahu（ヤーフー）てふ神名があるのから考へると、然りと答へる譯にはゆかぬ。Sir Henry Rawlinson（ローリンソン）氏は此の Jahu（ヤーフー）は眞にアッシリヤ名なるや疑はし。恐らくはアッシリヤへ這入り込むだシリヤ名であらうと云はれたが、Schrader（シュルーデル）氏等は之に反對して、ヤーフーはアッシリヤの古神の一であるのみならず、Accadia（アッカヂヤ）起原のものだと云ふ。Delitsch（デリッチュ）氏の說に曰、I（イ）の音はアッカヂヤ語では「神」及「至高神」を意味して居る。例へば、ii ila（イラ）（ヘブライ語 El）に於て知るべし。此 I はアッシリヤ語では ii-u（イウ）と發音する、但しアッシリヤの刻文で Ya-u てふ語が「神」の名に使つてあるのは、從來發見された刻文の中にはないが夫れは偶然なのであらう。

私は敢て此等斯學の大家と議論しやうとするのでない。唯今日では吾人の研究がバビロンやアッシリヤの文書を完全に讀解する迄に進んで居らぬのを遺憾に思ふのである。勿論 Behistun（ベヒスタン）刻文のバビロン譯が出版された以來、大進歩はあつたにせよ、未だ確定說を立て得る程に十分でない。この事はペルシヤの楔形文字（Cuniform）（キュニフォーム）翻讀

の歷史に徵すれば明である。況んや Sumeria 語に至りては其研究尙甚だ幼稚なるをや。然るにかくの如き危き材料を用ゐて、「古代比較宗教史」を著されたるチーレ氏等の勇氣には嘆服しなければならぬ。けれども又 M. Guyard 君の警告にも注意しなければならぬ。君は言ふ、「Moulge, Silik-moulon-chu」なる語は Sumeria 及アッカヂャの神名とせられてゐるが、之は Bel 及 Mardak の名を誤り解したものだと。ギュ君自身の言だけならず或は、信憑するに足らぬかも知れぬ。けれども君は Pinches 氏の言を引用して居る。ピ氏が此學に於ける造詣の深きや、典據として價値あるべきは疑はれない。ピ氏の曰く。アッカヂャ諸王の名に「Hammurabi 又は Burnburias などあるが實は Kuterapastu Kidiu-belmatati とすべきだと。

然るにキウチン氏は、エホヴァー或はヤーエーはアッカヂャ起原のものでないとして云はれるには、紀元前九百年頃卽ち Mesha の刻文の時



代頃では Jahveh なる語は四字形で用ゐられて居た。卽ち Y(a)hv(e)h である。こんな形は Iau からは出てくることはできぬ。否却りて Iau こそ Y(a)hv(e)h から出たのであらう。第八世紀頃一般に行はれて居た說ではヤーエーは動詞の「ある」から出た。卽ちヤーエーとは「彼はある、存在する」の義で、神の常住で信賴すべき者なることを言表はしたのだとして居る。但し此說の正否は保證の限りにあらずと。而して氏は尙進んで、イスラエルの神の名を、エル、シャッダイの代りにヤーエーと呼んだのはモーセに始まるとして居られるが、私は何故氏が此語の已にモーセの母の名 Jochebed（ヤーエーを己が幸榮とする女）の中に含まれてることを云はれなかつたかと怪しむのである。氏はヤーエーを「存在せる者」の義か或は「他神は存在せざるも、獨り自ら存在せる者」の義かを定めずに置き、唯共根語を因果的の意味に解して、ヤーエーとは「生命を與ふる者」「萬

物を存在せしむる所以の者」即ち「創造者」と解し去らんとして居られる。かくの如くに見ることができるならば、ヤーエーは古エーダの Asura（アスラ）の再現と見做すことができる。アラスとは、「生命の授與者」の義、Asu（アス）とは「息する、存在する、」の義、そこで Asura（アスラ）は活ける又活かしむる神即ち Avesta（アヴェスタ）の Ahura（アフラ）となる。するとアールヤ族とセム族は有史以前に、Iran（イラン）の地に於て接觸したと云ふ史的證跡は未だ擧がらないけれども、當時此二族が同一の思想及言語を持つて居たことは知れる。

之を要するに、ヤーエーなる名はセム族共有の神名中の一とすべきか、除くべきかは未だ確定すべからざるにもせよ、兎に角セム族は其分裂以前に於ては同一の言語と宗教を持つて居つた事丈は動かぬのである。アールヤ族が、皆同一の名で天の父を呼んで居つた時代のあつたと同様に、セム族もバビロン人がシドン及チレに、猶太人が Mesopotamia（メソポタミヤ）若しくはエルサレムに夫々住み込むやうになる前には何れも皆エル、即ち「天の強者（セストロング・イン・ヘヴン）」を拜んで居たことは確である。

終りに、吾人はツラニヤ族に付て觀察しやう。Finns（フィン）, Lapps（ラップ）, Samoyedes（サヤ）, Turks（トルコ）, Mongol（モンゴル）及 Tungusians（ツングイス）等の諸種族の言語が太古に於て集中固定をなした事は諸學者の許して居る所であるが、Tamulic（タムル）, Lohitic（ロヒ）, Gangatic（ガンガ）, Malaic（マレイ）, Taic（タイ）諸種族の言語にも同樣の集中固定があつたと云ふ事と及此等南北兩ツラニア語の最古の中心は支那語であると云ふ事との二事は只假定であつて未だ確說とは見られぬのである。併し若し此等諸語の中に共通の神名を發見し得たならば、此假定說は大に其確度（プロバビリテー）を增すであらう。宗教に就て云ふも同樣である。

若し支那の宗教をツラニア族の夫れの最古の代表者としたならば、他のツラニヤ族、例へば滿洲人、蒙古人、韃靼人若しくはフィン人等の神

話中に同一神名があるかと云ふ疑問が出て來る。然るにツラニヤ語は其性質が其變化的轉移的であるし、且つ支那に於ける最初の固定と、後に他種族に於て生じた固定との間に非常なる長年所が横はつてゐるからして、どうも、かのアールヤのヂャウス、ピタルやセムのエルに比べるべきものが傳はつてありそうには思へない。然るに幾等かの指示はある。甚だ僅少の指示ではあるが、だといつて夫れを危むで遠慮してゐた日には何れの時か新發見ができやうぞ。安心な陸地へ達する迄には折々は水の中へも飛込まねばならぬ。堂へ上るには先づ第一段を踏まねばならぬ。私の説はホンの臆説であるけれども敢て隗より始めるのである。

支那古代の一般信仰は諸靈、諸力或は寧ろ諸名崇拜である。自然力は人生の吉凶を引起すものと考へて、其名を崇拜するのである。天空、日、月、星、地、山、川各自に皆靈がある。又死者にも靈があるが、夫れは今暫く云はぬ。

又支那の上流社會には一種の體系を備へた説が行はれて居る。萬物には相反せる二力が貫いて居る。一は能働的で男性で、他は受働的で女性であつて、各物の中に、上に、後に必ず存すとしてある。又屢天と地とに配してある。

併し天の靈は地の夫れよりも上位を占めて居る。天地は萬物の母とは只書經丈けにあるので、古詩には天のみが父母であるとしてある。此天の靈の名を支那語でTien（ティエン）と呼ぶ。天空（ッ）の義で、丁度、ジュピター若しくはアラーとでもありそうな所にはいつも、きつと此字にぶつゝかる。康熙字典によれば、チエンは高きに居て下を御する大なる者とある。されば元は天空（ッ）の義であつたのが段々と向上したのだ。アールヤ語の空の

名が徑たのと同じ段階を徑て上つたのだ。天は大と一との集合で、「一つの者」「比類なき者」「偉大なる者」「高き者」「揚れる者」としての天空である。

或る支那の書に曰く天空は一つのみ。豈多くの神あらむやと。實にチエンの信仰は支那宗教の骨髓である。又曰く、皇天燦たり、汝の趣く所に隨ふ。皇天燿たり、汝の遊ぶ所に到ると。「天は萬物の祖である。上にある最高者である。陶師其器を作るが如く、諸物を作りたる者である」と云ひ、又「天命」「天意」「天歩」「天道」などの文字が見える。民の師たる聖人は天が送つたのである。孔子自らも自分は世の警戒者として天に使はれて居るものであると信じて居た。故に其危に際しては嘗て曰く、天我を知ると。此事は實に彼に取つては唯一の慰藉であつた。又孔子は天の靈を最高神と見て、他の一般人民の神即ち山川、風雨、死者、の靈は劣位の者としてゐた。是はソクラテスが神話中の諸神に關してもつてゐた考へと同じである。孔子は嘗て如何にして鬼には仕ふべきかと問はれた時「未だ人に仕る能はず如何ぞ鬼に仕ふる事を得ん」と答へ又或る時は「敬して遠けよ」と教えたのである。

さて、吾人は今、天の靈の信仰は果して、他のツラニヤ諸種族にも行はれて居るかを調査しなければならぬ。若し彼等諸種族の神名中に、最高神で空（ソラ）の意味のが、見當るならば私の臆說は幾分か確度が増すであらう。併、夫れ丈けではまだ臆說に止つてゐるが、若し、夫れに同一の名の痕跡を認め得るやうなことがあつたらば、私の說はもはや臆說の域を超へて爭ふべからざる事實となるであらう。

然るに支那以外のツラニヤ諸種族の古代史はさつぱり知れん。彼等の現時の狀態に關する報告も偏見的なのが多い。且つ彼等の古代の信仰の遺跡は佛教や回教や基督教の爲めに蹂躙されて殆んど湮滅に歸

して居る。併し中央及北方亞細亞を拔跡した旅行家の中で最も信憑するに足ると思はれるのはCostren（カストレン）氏の書である。氏の報告によると、ツングイ、蒙古、韃靼、フィン人等の間には到る處に、自然の諸靈、死者の靈が崇拜されてゐるのみならず、夫等よりも高き一つの有力者に向つての信仰も行はれて居る。此有力者は或は「父」或は「古き者」「創世者」「護世者」「天に常住せる者」などと呼ばれて居る。

支那の史家で此類の事を記したのは重に匈奴と土耳古とに關したものである、彼等に據ると、匈奴は日、月、天、地、死者などの靈を拜し、其僧はShaman（シャーマン）と名つく、シャーマンは能く雲、風を呼び、雪、雨を降らすの力ありと云つてある。[1] Byzantine（ビザンチン）の史家Menander（メナンダー）氏に據れば、氏の當時には土耳古人は火、水、地を拜し、又同時に、世界を造りたる一つの神をも信じ、駱駝、牡牛、羊の犧牲を獻ずとある。中世紀の旅行家Plano Carpini（プラノ・カルピニ）及Marcopolo（マルコポロ）等も亦、蒙古人は日、火、水を尊崇すされど又一つの大なる力ある神を信じ之をNatagai（ナタガイ）（Natigay（ナチガイ））又はItogaと呼ぶと云つてゐる。[2] カストレン氏は具眼者であつて凡常旅行家の見聞、解する能はざるものを見、聞、解し得た人である。が氏の言に云ふ、ツングイ人は日、月、星、地、火を拜し又森、川及若干の聖地の靈を拜す。但し此等と共に又、Buga（ブガ）と名くる最高神を信ずと又曰くサモヤ人は偶像及諸種の天然物を拜すされど、又高き神力を信仰せる事を常に告白しつゝあり。彼等は之をNum（ヌム）と呼ぶと。

1、Castren. Vorlesungen uber Finnische Mythogie p. 36（カストレン氏「フィン人の神話講義」）

2、「彼等は、見るべき又見るべからざる凡ての物の作者、善惡の分配者たる一つの神を信ず、されど之を拜するに祈禱をも、讃歌をも又何等の奉事をも用ひず、但し皮製の若干の偶像あり、人面を模す。面の下方に乳房様のものあり、像は家の內外に置かる。家舍の護者にして又牛乳を豐滿に授くる者と信ず。又絹片にて作れる像

あり、是も大に尊敬せらる。飲食毎に先づ其一部を割きて獻ず」――「マルコポロー」Yule 氏出版 V. I p. 249

3、「こは彼等の宗教の風習なり。彼等云ふ、天に最高神ありと、毎日香を焚きて之を拜し心身の安康を祈る。されど他にナチゲイと稱する神々あり。云ふ是れ地の神にして子供、家畜、穀類を護ると大に之を尊敬し其像は各人の家必ずあり。皮と布片にて作る。又神の妻子の像をも同じ方法にて作る。妻神は左方に、兒神は前面に置かる。食事毎に肉の脂肪を取りて此等各神の口に塗る。次で羹汁を戸外に灌ぐ。之を爲し終れば、被等は神は其眷族と共に食事に與れりと信ず」と(仝五、一卷、二四八頁)ユール氏は此等のナチゲイはツングイ人の Ongot Buriates(オンゴト、ブリアト) 人の Negat(ネガト) より出づとし、ポロー氏は Cathayans(カタヤ人) 即ち支那人より來るとして居る。併しユール氏は之はポローが支那人と韃靼人とを混同して居るのだと云ふ。

4、之れは即ち魯西亞の Boga(ボガ)(神)にはあらざるか。

Num(ヌム) は又の名を Jnma(ジュマ) と云ふ。Finland(フィンランド) の大神話に Jumala(ジュマラ) とあるのが即ち是である。有名なる此大神話は他のアルタイ種族の神話よりは完全に保存せられたものである。其他古の史詩も傳はつて居る。之は久しい間、口碑で傳はつて來たのが近時に於て誌錄に付せられたものである。此詩の中ではジュマラは天空(ソラ)の神で種々豐なる物語がある。

ジュマラとは元來は天空(ソラ)の義で、カストレン氏の說の如く Juma(ヂュマ)(雷)と la(ラ)(所)即ち雷の所、即ち天空(ソラ)の意味である。そこで、最初には天空(ソラ)次には天空の神となり、後には一般の神の意味となつた。此語は Lapps(ラザブ), Esthonians(エストニヤ), Syrganes(シルガン), Tcheremissians(チエレミシヤ), Votyakes(ウオチヤク) 人等の語中にも見えて居る。但し語形は聲音學上必然なる丈けの變化は免れぬ。が兎も角、此神の發生及變遷を觀察したならばアルタイ種族の宗教思想の一班を窺ひ得るであらう。カストレン氏が嘗てサモヤ種族の一老婦人に向つて汝は祈禱

を行ふやと問ふた時、老女が答に曰く、毎朝天幕を出づれば太陽に向ひ、叩頭して云ふ、「汝の出る時我も亦床を離る」と、又毎夕に於ても「汝の沒する時我も亦臥して息ふ」と言ふと。思ふに、此祈禱は恐らく彼女が神への奉仕の全部でがなあらう。此祈禱は我等が眼には如何にも氣の毒な憐れなつまらぬものゝやうに見える。けれども彼女に取りては決してそうではない。何となれば此老婦人をして少くとも一日に二度丈けは、眼を地から天へ向けしむるものは此祈禱ではないか。之は彼女の生命を、高き大なる生命と結び付けるものである。地上の俗生活に一點の神聖なる光明を授けるものである。夫故に彼女自らも己れを正しとして誇り顔にこんな事を云ふて居る。「朝夕の祈をさへ行はぬ暴漢（ナラズモノ）もある」と。

右の場合ではジユマラは太陽によりて代表されたる天空（ソラ）の神となつてゐるが場合によつては海の神ともなる。カストレン氏が或日、サモアの水夫と北極の海岸を逍遙してゐた時「我に告げよ、ヌムは何處にやをはす」と。すると聲に應じて、忽ち黑き遠き海を指して「彼處にをはすなり」と。

又史詩 Kaleval（カレアル）の中には、女主人公の Pohjola（ポージヨラ）が仕事をしつゝ、呼んで云ふには「來りて浴（ゆあみ）みせよ、オヽ空氣の主よ」と又次のやうな句もある。

「空氣の主ジユマラよ汝の馬を裝せよ」云々×

併しジユマラの性質は不定であつて、或は天空、或は太陽、或は海、或は空氣、若しくは凡て此等の物に於て現ずる最高神ともなるので、何れともきまつて居るのではない。

×汝の逸物を出せよ　輝く旗かざし橇驅れよ！　我等の骨、我等の關節の中を、
震ひをのゝく肉の中を　破れつらんごとき脉の中を、　肉と骨とを縫ひ合せよ！
脉と脉とを確く結べよ！　我等の關節に白銀を充たし　我等の脉に黃金を流れしめよ！

さて茲で問題は、此神と支那のチエン(天)とは如何なる類似あるやといふ事にある。北方亞細亞のアルタイ諸種族間にシユマラ崇拜が通同に行はれれて居る事から、其處に一つの宗教的集中化のあつた事は推知される。併し其事丈では此等諸種族と支那古代の住民との間に共通の祟拜のあつた事の證とならない。チエンが天空、天空の神、及一般の神の意味をもつて居る事はジユマラと同じである。此事丈は慥であるが出來得べくは、吾人は更に進んで、恰もジユピターの名が印度や伊太利に殘つて居り、エルの名がバビロンやバレスタインにもある如くに、支那、蒙古及韃靼等にも同一神名、少くも其痕跡の存してゐるのを見出したい。

處で茲に先づ注意せねばならぬ事がある。支那語は一綴音的(モノシラツク)であるのに、後のツラニヤ語は已に膠着時期(アグリユチ子ーチーヴ、ステージ)に入れる者、卽ち語尾添字(テリペチーヴサツフイツクス)を用ゐて居る事である。此事を腹に置いて調べて見るとチエンなる支那語は其意味と共にツラニヤ族中の重要なる二三の種族中に其痕跡を殘して居ることを發見するにさまで難くはない。蒙古語に Teng-ri(テンリ) と云ふのがある。是だ。是は第一に、天空、次に天空の神、次に一般の神、最後に靈若しくは鬼(善惡共に用ゆ)を意味して居る。

匈奴の古代史を書いた支那史家に據るに、匈奴は其首領を tanli-kutu(タヌリクツ) Tchen-jü(チエンジユ) 單干?)と云ふとある。之は天子の義で卽ち支那の tien-tye(チエンツヱ) である。(因に曰ふ、天子を「神の子」と解する俗說あり、誤れり、「天の子」卽ち「神の惠によつての帝王」の義なり)此 tangli(タンリ) はチエンに當るのである。表に作ると左の方程式ができる。

匈奴語 ……Tang-li(タンリ)

蒙古語 ……teng-ri(テンリ)

支那語 … tien（チエン）

又支那の史家が土耳古人の祖先 Tukiu（タキウ）に付て記してゐるのを見るに、彼等は地の諸靈を拜し之を Pu-teng-i-li（プテンイリ）と稱すとある。Pu（プ）とは地であらう。そこで teng-i-li（テンイリ）は teng-ri（テンリ）に當る事になる。但し、土耳古では此語は夙に天或は神てふ意味を失つて、一般の神の義となつたのである。近世のヤクト語の tangara（タンガラ）も之と同様の意義上の變化をして居る。此語は元は天空及神を意味してゐたのだが、現今シベリヤに居るヤクト人の間の耶蘇教徒は之を「聖者（セーント）」の意味に用ゐて居る。又ヤクト人は野の馴鹿（カモシカ）を、神の馴鹿と稱へて居る。之れは荒野に住んで神以外には其保護者がないと云ふ譯なので。

是に於てか吾人は支那、蒙古及土其古に於ける同一の神名は啻に其漠然たる意味と音韻との類似を有せるのみならず、其觀念の有機的發達が相一致してゐる事を知るのである。即ち何處に於ても先づ天空の意義を以て始まり、次で上りて、神の義となり、後下りて、諸神及諸靈の義となつて居る。此の如き變化は凡そ、神が天空の名の下に始めて認められた所では、いつも發見せられるのである。天空の神は神話的に分裂して數多の神となり、此等多くの神より遂に一般の神の觀念に到達するのである。かくの如く見來れば、佛蘭西語の Divinite（デヴィニテー）と韋陀の Dyaus（ディヤウス）（天空）との關係が史的に說明——即ち字學的（エチモロヂカリー）及聲音學的（フオヂカリー）に說明——し得られる。ヤクト語の Tangara（タンガラ）（聖者）と支那の天（テエン）（天空）との關係も同樣の譯である。

然し、若し只の意義と漠然たる音韻の類似ばかりから推定してもよいのならば、南北ツラニヤ間の比較をなすことはやさしい。例へばサモア語の Nuu（ヌマ）と西藏語の Nam（佛性？）との如きは單に響の上から云ふ

ならば Nam（ナム）× と Num（ヌム）は Num（ヌム）とフイン語の Jumala（ジュマラ）とよりも一層近いのである。然るにナムとジユマラとの類縁は聲音學上疑ふべきではないけれど、ヌムとナムとに於ては聲音學の規則上 a（ア）が o（オ）に變じ得ることが許され、且つ同一の根語が發見される迄は其類縁を云ふことはできない。

× Jaeschke 氏の Tibetan-English Dictionary（西英字典）には之を gnam とし此說を立てんとす。以爲らく天、空の義なり。且つ gnam-tél-dkár-po は Horpa 即ち蒙古の神名なり。Nam-mkái-lo は鳥の翔り、聖者の位し電光及雷の住へる虛空の義なりと。

さて、今、更に眼を轉して支那の民庶が信して居る所の諸の小靈を見るに、其性質が北方ツラニヤ族の信じてる諸靈と酷似して居る、支那の所謂 Shen（シエン）（神）であつて、宇宙間の作用に於て感知せらるゝ所の不可見的の或者を意味して居る。此神に種々の階級がある。恐怖（こはがら）られてるのもある。病氣の靈もある。其數殆んど算ふべからずだが、主に三種に分ける。Tien-shin（チエンシエン）（天神）ti-ki（チキ）（地祇）、jin kwei（ジン）（人鬼？）とである。天神の中には日、月、星、雲、風、雷等があり、地祇の中には山、野、穀物、河、樹木、歲などがある。死者の靈の中で人民一般に尊崇するのは皇帝、聖人、及公益者の夫れである。又各家族毎に、其 Manes（マーチス）（保護神）があつて拜まれてゐる。

之と同一の宗教思想が北方ツラニヤにもある。唯、支那の如き曲細なる區別と煩鎖なる典式とが缺けてゐる迄の事だ。

カストレン氏曰く、ヌムの外、Shaman（シヤーマン）共が祈る諸神あり。Tadelbojós（タデルブクの民）と名づく。大氣、地、水等到る處の天然界に存する不可見的靈なり。是等を以て單に死者の靈となすものの多し。されど又劣等神の一團と見る者もありと。又曰く、フイン人の神話は神を以て充滿す。自然界の各物には其作者保護者として各 Genius（ジニウス）（靈）あり。Haltia（ハルチヤ）と名く、此等の靈は外物に

拘束さるゝことなく、自由に出遊し魂と身(カラダ)とを有し、獨立の人格を具す。而して其存在は只の一箇物に依屬せるにあらず。何となればゲニウス(靈)のなきものとてはなけれども、其靈は只の一箇物に限らるゝことなく、全類(クヌス)若しくは全部(クラス)を包括すればなり。此山、此灰、此石、此家に各靈あり、されど其靈は又他の凡ての山、灰、石、家をも保護すとせらると。

今此言を論理的に排列して見ると、凡そ宗教的思想の發達は何處でも同一であることが知られる。吾人の所謂 Essentia (エッセンチヤ) Generalis (ジヂラリス) (概質、普遍的本質)卽ち Tree-hood (ツリーフッド) stone-hood (ストーンフッド) Honse-hood (ハウスフッド) (木性、石性、家性、—木、石、家の抽象)なるものはフィン人等の Haltia, (ハルチヤ) Tadelbojos. (タテルブクスヨス) 支那人の「神」である。吾人は今日事もなげに、概質(エッセンチヤ、ジチラリス)と云つてるけれど未開人の心には中々其意味を知る事はできない。多くの木を林、多くの日を年と云ふ時は、其處に何か實體的個體的のものがあるやうに思ふ。個體觀念から一般觀念に



直觀的(インチユイツジヨナル)から概念的に、實在的から抽象的へ遷り行く際には、林、年、雲、光等の諸神となるのである。

祖靈崇拜も北ツラニヤと支那とに共通の現象であるが、但し之は世界到る處存せざるはなき迷信であるから、餘り力を入れて云ふべきほどのものでない。併し此の迷信が支那と北ツラニヤとに於て殊に十分に發達して居るのは一寸妙である。カストレン氏の曰く、フィン及アルタイ種族の多數は死を恐るゝと甚しきも、死は個體の存在を全滅するものとは信ぜず、彼等の中、來世を信ぜざる輩と雖、尚ほ、死者の生存を表示せる者たる葬禮を遵守し、食物、衣服、牡牛、小刀箱、鍋、櫂等を墓上に置く。強ゐて、其所由(イハレ)を尋ぬれば、答へて曰ふ、之れ死者をして、漁獵、戰爭等其生

前なしし事をなし得べからしめん爲なりと。ラップ人フィン人も亦肉體は亡ぶと云ふ。されど、又新なる肉體が下界に於て獲らるると云ふ。又死者は幽靈或は精靈となりて墓、冥界、地上特に深夜及風雨の際出で來ると云ふ者もあり。風の音、木葉の鳴る音、火の響等に於て其居住は表示さるるも通常人の眼には見るべからず。只シャーマンのみ之を見、且つ其意向を占知するを得とす。奇なるは、一般に此等の靈は惡性の者とせらるゝ事なり。特にシャーマンの靈を然りとなせり。シャーマンの靈は或は安眠を妨害し、病氣災禍を送り、親戚の者の心を腦ますと考へらるゝが故に、之を防がん爲めにあらゆる工夫を行ふ。死骸を戶外に送る際には、赤く焚きたる石を其方へ投ぐ。是其歸り來るを妨げん爲めの咒術なりとぞ。又墓に食物等種々の品を供ず、是れ死者をして其歸來の口實なからしめんが爲なりとぞ。Tchuvashes（チュヴァシュ）人の子等は父の靈に供物を献じ祈りて曰ふ。汝に饗應せん。見よ、茲に麵麭（パン）あり又諸種の肉もあり。汝の要する一切の物あり。願くは我等に害をなすなかれ、我等の近くに來るなかれと云ふ、と。之れは死者が、若し此等の供物を與へられぬと、怒りて、其復讐として、病氣や災禍を送つてよこすと信じてゐるのである。古代の匈奴等は其酋長の墓へ虜を屠つて供した。是れはシャーマン等が、そうしなければ首長が怒り出して宥むる事ができぬと言ふからである。同じ匈奴は又祖先の墓へ定期に供犧をなして居つた。シベリヤから中央亞細亞へ轉住した所の Topas（トーパス）種族が其故地の祖先の墓へ使節を派して供物を奉献した事がある。此等の墓には高き柵が囘らしてあつた。夫れは、其中へ生者が這入らぬ樣又死者が外へ出て來ぬやうとの用心だ。又或墓には立派な修飾がしてある。夫等の墓が遂には殆んど（支那では全く）殿堂と化して死靈崇拜の場所卽ち廟となつたのである。死靈崇拜

に順序がある。墓上に一つの花を置くのが始まりて、皇廟の祭りが頂點である。之れは、天子の靈は Shaug-te（シャンテ）即ちチエン（上帝即ち天）即ち最高の靈と同等と見做して、他の諸靈以上の者と信じたからである。

之を要するに、支那の煩鎖なる典式とフイン人の簡素なる禮拜と一見宵壤の差があるやうではあるけれど、同じく共に宗教的信仰の原始の段階にあるもので其實質は全く同一である。即ち、第一には天空の崇拜である。最高者の觀念を表示するに、未開の人心では天空以外の者を以てすることができぬのであつて、此崇拜によりて人間の精神は膨脹し向上し、終には無限者存在の信仰に到達し得るに至るのである。第二には自然の諸靈若しくは諸力の信仰である。之れは人間の宗教心の最直接の要求を滿足せしむるものであつて、人心の想像力を養成し古代の詩歌に高尚なる題目を供給したものである。最後には祖靈存在の信仰である。所謂其靈は意識的のものであるか、無意識的のものであるか、或は物質的のものであるか、精神的のものであるか、何れにせよ、此信仰こそは凡ての宗教の生命の源泉である。

本講演を終るに臨み其要領を擧ぐれば

第一、言語と宗教の間に自然的親緣の存すること、從つて、言語の分類法は古代宗教にも適用すべき事

第二、アールヤ族分裂以前にはアールヤ族共通の宗教あり、セム族分裂以前にはセム族共通の宗教あり、支那人と他のツラニヤ諸種族との分裂以前には彼等共通の宗教ありしこと、即ち古代に於て言語に三个の中心ありし如く、三个の宗教的中心の存在せし事

以上の事は世界諸宗教の史的研究には其眞の基礎となさるべきものであると私は信じて疑はないのである。

## 第四講

（千八百七十年三月十二日）

上來私は、理論的神學、卽ち、宗教哲學は必ず比較神學、卽、宗教の比較研究、を基礎とせんければならぬ事を述べ且つ其研究の際如何なる方法に依て其方針を定むべきかを論じた。思ふに此方向の研究が進歩するならば、爲めに神學は多大の影響を受けるであらう、恰も言語の比較研究の爲めに從來の言語學が受けた夫れの如く。併し、其爲めに從來の神學が無用になると云ふのではない。それは、彼の Grimm（グリム）や Bopp（ボップ）や Humbolt（フムボルト）の著書の出た後と雖 Plato（プラト）の Cratylus（クラチルス）や Harris（ハリス）の Hermes（ハルメス）や Horne Tookes（ホーン・タック）の Diversions of Purley（ダイヴァーションズ、オフ、パーレー）等の書が尙價値を持てゐるやうなものであらう。然し、古今東西の諸宗教を比較研究する其結果は必ずや從來の宗教哲

學―ジエリングのと云はず――をして其面目を一新せしむるに相違あるまい。見よ、幾萬年間埋れて居た所の化石の類が材料となつて、如何に地質學を進歩せしめたかを。實に近世科學の進歩は皆其材料の區域と種類が增大した御蔭である。

私は本講に於て古への宗教を解釋し研究するに就て、取るべき態度精神を一言して大尾を告げやうと思ふ。

抑も從來の史家及神學者が世界の諸宗教に對する取扱ひ振りの苛酷さ加減と云つたら、實に如何に辛辣な裁判官も及ばないのである。苟も某教祖の傳記とし云へば、一言一行、用捨なく促へ來りて、解剖し評騰し、毫も假借する所なきのみならず、其言說の本意の那邊にあるかを見究めず、只其皮相上から、出來得る限りの惡しき意味に於て之を解釋し、之に加ふるに、自分の信仰以外の者に向つては嘲笑と輕侮とを以て臨むのである。故に味方に於ては天使以外の何者をも見ざらんとし、敵者に於ては天使以外の何者をも見んとするのである。アヽ此の如き結果や夫れ知るべきのみ。基督教以外の宗教と來ては其眞相にも其特質にも全くの盲目で、一切の宗教を擧げて僞宗教だと云ふに至つた。否之よりも尙甚しいのは、基督教以外に救濟の道は求むべからずと偏執して、基督教以前の宗教の價値を全然沒却しやうとする。アヽ若し夫れ宗教の比較研究がかかる僻見を打破し得んか、其一事以て研鑽の勞に報ゆるに足るであらう。

吾人は古代の詩歌に親んだ、古代の藝術を知つた、古代の哲學を讀んだ。而も未だ指を古代の宗教に染めざるは何ぞや。人は埃及やバビロンや希臘の古殿堂を見て嘆稱する。Pheidias（ファイダヤス）等の作つた神像の前に恍惚と己れを忘れて居る。而も、Athene（アテヂ）の堂やゼウスの像に現はされて居る所

の宗教的感想に對しては之を唾棄して顧みず、一概に之を偶像崇拜なりとし、エピクレス Epikles やファイヂャスやソクラテスやプラトーをも一括めに木石崇拜者流の列に葬り去らうとするは何事ぞや。知らずや、古人を我等に一層親近ならしむる所以のものは其哲學よりも詩歌よりも美術よりも寧ろ宗教にあることを。優劣の差こそはあれ、彼等も兎に角或宗教を持つて居たと云ふ事にあるを又知らずや、其宗教微りせば其哲學も詩歌も美術も不可能であつたことを。アヽ吾人若し仁愛の心を以て見、偏固の眼を去るならば、美と善との新世界は、恰も雲霧を開いて青空を望むが如く、燿然として古代神話の背後より湧現するであらう。

今日に於ては何等の幸ぞ、吾人は恐るヽ所なく、自由に口をきくことができる。慈悲仁愛の心を以て他に接することができると云ふと變なやうだが、實はさうはできなかつた時代があつた至高の宗教的眞理も



只盲的熱狂と火と劍とによらずば勝を奏する能はずと考へられた時代があつた。あらゆる偶像は破壞せられ、其祭檀は蹂躙せられ共信者は殺戮された時代があつた。

今日は吾人はバールを恐るヽ要はない、ジュピターを憚る要はない。吾人の持てる危險と困難は他の種類のものである。天地を創造し玉ひたる神、自己に肖どりて人類を作り、休みなく之を導き玉ふの神が、いかで、凡ての宗教を僞物にして置いて彼等を見捨て玉ふやうの事あるべき。眞摯なる宗教研究は、聖オーグスチン (Augustine) が教えた事を教えてくれるのである。彼の言に曰く、眞理の幾粒かを含まざる宗教はあることなしと。否古代宗教史を研究するものは、更に一歩を進めて、宗教は「神のせさせ玉ふ人類の教育」(Divine education of the human race) なることを覺るであらう。

世には、救濟を與ふものは自家の宗教以外にあるなしとして、自分の
と其他のと—波斯教、佛教、孔子教等の如き—の間に截然たる溝渠を造
つてる輩がある。かゝる輩は世界宗教史を人類の教育と解することは
到底できまい。然るに丁度かゝる見解は彼の輩が低頭尊奉する偉(エラ)い方
々の御教しえになつてる所だとは御存知ないか。大(メイ)それた英吉利の僧
正様や獨逸の哲學者先生に尋ねに行く迄もない。法王でもよし、教父で
もよし、使徒でもよしどの方々も皆此事を仰せられてある。

新舊兩約書を合せて研究する人は必ずや、基督教の眞精神は舊約書
中には含まれてゐないことを知るであらう。而して、新約書の眞福音到
來迄には長年月の距離があるから、何故に神樣は其久しき間人間を暗
黑中に彷徨(サマヨ)はしたのであるかと疑ふであらう。レオ大法王 (Leo the great
(四四〇—四六一)は答へて曰く、是れ蒙昧の人間を神の召しに適すべく



準備せしめしなり。神の人の利福を慮るの切なるや、曾に此新慈悲新教
訓を以てせるのみにあらず、太初より既に、凡ての人間の爲めに、同一救
濟の道を設け玉へるなりと。

又 Ireneus(イレヂウス) 氏は、古代宗教の不完全なるは已むを得ざるに出づとして、
之を說明するに曰く、慈母は赤兒に完全なる食餌を與へ得ざるにあら
ず、只赤兒は大人の食を受くるに耐えざるを如何せん。之と同じく、神は
最初よりして、完全なる眞理を人間に授け得べかりしも、人間は之を受
くる能はざりしなり、彼は尙未だ赤兒なりしなればなりと。

若し以上二人の言を以て後代の勝手な放言だと云ふなら、請ふ使徒
等の言を聞け。パウロは言はずや、「立法は猶太人に取りては學校教師な
りしなり」と。又ペテロは云はずや「神は人間を尊敬するものにあらず。さ
れど、神を恐れ、正を行はんものは其何れの國民たるを問はず必ず彼れ

に容れられんと云ふは眞なる哉」と。

併し吾人は彼是と典據を捜し廻るには及ばない。唯(オープンハート)開ける胸と仁の心を以て古宗教の文書を讀めばいゝ。吾等若し一度斷乎たる決心を以て他者を信用し、毫も疑念を挿むなく、惡しく考へず、又「己れは隣人に優れり」なんどの自惚見(ケン)を廢(ヨ)してしまうならば、此全世界——よしや之を惡世界と呼ぶ者は呼べ——は恰も夢の覺たらん如く俄然其面目を變じて現ずるであらう。人樣は忠實なもの、善良なものと思切つて信任しなさい、ずると、よし、そうでなくても、汝の信任が彼を善良にし忠實にするに至るであらう。世界の宗教に就て云ふも又此の如し。或者が云ふ如く自余の宗教は果して惡魔(サタン)の所作であらうとも、我と彼とは初よりしてしかく徑庭があつたのでない。世に善をなせよ。惡を避けよと教をざる宗教があるか。蓋し之あらん、我未曾て之を聞かざるなり。Rabbi(ラビ) Hillel(ヒレル) 氏は「善なれ(ビーグッド)我兒(マイボーイ)よ」てふ句こそ宗教の本膸なれと云はれたが、私は之に更に一語を加へて「善なれ、我兒よ。神(フォーアゴッドセーク)の爲めに」と致したい。思ふに此句は以て立法及預言者所說の全體を盡ずに足りるであらう。

私は是から、舊世界の諸聖典より拔萃したものを茲に朗讀しやうと思ふ。是等は何れも黃金よりも尊き眞理の顆粒である。但し、茲に出すのはホンの見本だけです。

さて愈(イ)で是から第一に讀み上げますのは Vasishtha(ヴシシュタ) と申す所のエーダの預言者が Varuna(ワルナ) 神(希臘語の Ουρανός 天空の義又天空に住する神の義)に獻げたる祈禱であります。

が、少くとも最初の一句だけは原文其まゝに讀みます、——之はリグ韋陀第七卷第八十六の讃歌です。抑も是は三千年の其昔し、Sutledg(サトレッヂ)河畔は Catadru(シャタドル) と申す所の一村落に於て吾々の通りに感じ、話し、信じ居り

ましたる黑い顏の一印度人—牧者で、詩人で、僧で、家長で、慥に聖書の中の David（ダヰッド）と比肩すべき程の人物—が發しましたる語音其まゝ諸君の御耳に達したいと思ふのであります。若し夫れ此詩人が思想の大海に與えた一衝動から起つた波が傳はり〳〵て幾千百年の後吾々の海岸を打つたので其波の音が語るを聞げば、是ぞ、かの古へのアールヤ詩人が天地の作者全能の神の存在を感じた時及び、同時に己が罪の重さを感じて宥免されんことを祈つた時の感想であると思いましたならばなるほど精神ちうものは金剛不壞であるわいと感じずには居れますまい。

Dhîrâ（ヂーラー） tu（ツ） asya（アシヤ） mahinâ（マヒナー） janumshi（ジヤヌムシ）
vi（ウイ） yas（ヤス） tastambha（タスタムバ） rodasî（ロダシー） chid（チツド） urvî（ウルウイ）.
pra（プラ） nâkam（ナドカム） rishvam（リシュヴム） nunude（ヌヌデ） brihantam（ブリハンタム）,
dvita（ドヰダ） nakshatram（ナクシヤトラム） paprathach（パプラタチ） cha（ケヤ） bhûma（ブーマ）

「廣き蒼穹（天と地）を分ち支へたる彼れの所作は賢且壯なる哉。彼は輝ける榮ある天を高きに擧げたりき。彼は星充てる空と地とを分ち、突き出せり。

「我は我自からの我に之を云ふか。如何にして我はヴルナに近くを得るか。彼は怒ることなく我献げを受けんと思ふや。何時我は彼れの和らぎたるを、靜心（シヅ）もて見るべきや。

「此我罪を知らんと欲して我は問ふ。オヽ、ヴルナよ。我れ行きて賢者に問ふ。諸聖の語る所皆同じ。曰くヴルナこそは汝を怒るなれと。

オヽ、ヴルナよ。常に汝を讃美する汝の友を、汝の毀たんとするは古き罪の爲なるか。我に語れ、汝、克つべからざる主よ。我は罪より

免れ讃美を以て速に汝に歸らん。

我等の罪より、又我等自らの肉體もて行ひたる罪より我等を救へ。ヴシシユタを免るせ、小牛の如く。彼を免るせ、小牛の繩よりの如く。

オヽ、主ヴルナよ、願くば此歌汝の心に協はんことを。獲ることゝそは我等自からの所業（シワザ）にてはあらざりき。オヽヴルナよ、そは過保つことゝに於て我等の榮えんことを。我等を護れ、オヽ神よ、汝失なりき。醉はす飲物と愛欲と骸子（サイ）と無知とにてありき。其處にては、老いたる者若き者を導き誤らんとす、睡眠さへ妨げらる。我をして罪より免れしめ、怒れる神に仕へしめよ、奴（ヤツコ）が其主への如く。主なる神は愚者を誨ゆ。最賢者なる彼は彼を拜する者を富に導く。



の祝福を以て。」

（譯者白す、こは是英譯の全然的直譯なり。完全なる良譯は到底予が力の及ぶ所にあらず。さればとていかゞはしき鑿梅を加へんは中々に罪大ならん。讀者之を諒せよ。以下皆然り一々斷らず）

私は決して此讃歌の缺點に盲ぢやないと同時に其美點にも盲ぢやない。これ程の詩を三千年前の印度に於て發見したる喜悦（よろこび）は實に私一生の勞苦に酬ゆるに足りる。是れは何人も神樣に見捨てられてはゐないと云ふことの證據である。此確信は史學研究者に取りては無上の寶である。バビロンや埃及の歷朝の凡てよりも、はた又 Neanderthal（ネアンデルタール）や Abbeville（アブビール）の凡てよりも、湖棲（ラカストリヤン）時代の聚落（キレージ）の凡てよりも多くの價値があるのである。

尙二三の讃歌を御覽に入れる。

宥(ユルシ)を請ふの祈(リグ、七巻第八十九)

一、我をして未だ、オヽヴルナよ、地の家に入らしむるなかれ。慈悲なれ、全能よ、慈悲なれ。

二、我若し風に追はれたる雪の如く震ひつヽ彷徨(サマヨウ)はゞ、慈悲なれ、全能よ、慈悲なれ。

三、力の缺乏の爲めに、汝光れる強き神よ、我は彷徨へり。慈悲なれ、全能よ、慈悲なれ。

四、渇(カワキ)は拜信者に來れり、彼は水の直中(タヾナカ)に立てりしかども。慈悲なれ、全能よ、慈悲なれ。

五、我等人間、オヽヴルナよ、天の主人の前に過を犯さん時、我等無知の故に法を破らん時、我等を罰するなかれ、オヽ神よ、其罪の爲めに。

ヴルナへの讃歌(リグ、一ノ二五)

一、我等は汝の法を破らぬ日とてはなけれども、我等は人間なれば、オヽ神よ、

ヴルナよ、

二、我等を死に渡すなかれ、暴者(アラキ)の打撃(ウチ)にも、はた、忌はしき者の怒りにも。

三、汝を和(ヤワラ)げんとて、オヽヴルナよ、我等は歌を以て汝の心を解く、御者が疲れたる馬を(解く)如く。

四、唯富をのみ是得んと志す彼等は、失望して我より逃げ去れ、鳥が其巢への如く。

五、兵士(ツハモノ)よりも強き人を何時か我等は彼方(カナタ)に將(モ)ち去らん。何時か我等は遠きを見るヴルナを和ぐるを得ん。

「六、彼等（Mitra（ミトラ）及ヴルナを指す）は何れも同じく此事をなす、—溫
　雅なる彼等は忠實なる施與者を見誤ることなし。）
七、空を翔る鳥の所を知り、水の上の船を知れる彼。——
八、十二の月と其各の子とを知り、又後に生るゝ月を知れる、秩序
　の維持者たる彼、——
九、風の、廣きものゝ、光れるものゝ、能あるものゝ道を知り又高き
　に住めるものを知れる彼。——
十、秩序の維持者なる彼れヴルナは彼れの民の中に座す。彼れ賢
　者其處に座して支配す。
十一、其處よりして、あらゆる驚くべき、ものを認めつゝ彼は既に
　なされたる事と將になされんとすることゝを見る。
十二、願くは彼れ賢なるAditya（アーヂチヤ）は我等の道を生（イノチ）の終迄（ヲハリマデ）直くせん
ことを、彼は我等の生命を長ふせんことを。
十三、ヴルナは黃金の甲を着け、光れる外套を纏へり。牒者（スパイ）彼れの
　圍（マワリ）に座せり。
十四、罵る者も、人間を惱ます者も、害を巧む者も怒らし得ざる神。
十五、人間に藥を半ならぬ藥を授け、そを我等自らの我にも授く
　る彼。
十六、遠きを見る彼を戀かれて我思は進み動けり、牡牛が其牧場
　への如く、
十七、我等を再び會（アツマ）り語らしめよ、我は蜜を持參したれば、汝の好
　むものを食へかし、友達の如く。
十八。我は凡てによりて見らるべき神をや見し。我は空中の戰車
　をや見し。彼は我祈を受けしに相達なし。

十九、オヽ此我が請を聽け、ヴルナよ、優かれ、肋をと望みて、我は汝を呼べり。

二十、オヽ賢き神よ、汝は凡てのもの、天及地の主なり。耳傾けよ、汝のまに〳〵。

二十一、我の生存（ナガラヘ）を得ん爲め、上なる繩を我より取り、中なるを弛め、下なるを去れ。

リグ中に見ゆる神の最多數は上に擧げたるものよりも遙に神話的な性格を具へて居る。併し精神的道德的性格を全然缺如して居るのは殆んど稀である。が今其一例として次の讃歌を揭げる。此詩ではAgni.（羅甸 Ignis）神は火の代表と見做されてはあるけれど、其奥の方の遙なる所には、やはり、或神的要素が神話的皮殼に包まれつヽ閃めいて居るのが認められる。

アグニへの讃歌（リグ十一ノ六）

一、アグニよ、汝に獻ぐる此薪を受けよ、此我奉仕を受けよ、此等の我歌を聞け。

二、此薪を以て、オヽアグニよ、我等は汝を拜まん。汝、力の子よ、馬の制御者よ、又此贊歌を以て、汝、高き生れの者よ。

三、汝の僕、我等歌を以て汝に仕へん、オヽ富の授者よ、歌を愛し富を悅ぶ汝よ。

四、汝富の主、富の施與者よ、汝賢しかれ又强かれ、敵を我等より追ひ拂へよ。

五、彼は天より雨を我等に賜ふ。彼は破るべからざる强さを我等に賜ふ。彼は千倍の食を我等に賜ふ。

六、神々の中の最も若き者、彼等の使者、彼等の請ふ者、拜する價の

最も多かる者よ、來れ。我等讃美せん時、汝を拜し汝の助を望む者に。(來れ)

七、そは、オヽ聖者よ、汝は此等二種の被造(天と地、諸神と人間を云ふ)の間を賢しこく過ぐればなり、親しき使者が兩村の間を(過ぐる)如く。

八、汝は賢なり。汝は悦ばされたり、汝敏ときアグニよ、絶間なく供犧を行へよ、此聖なる草の上に座せよ。

此處には、奇、怪にも、同一神の中に道德的要素と物質的要素とが相混合してゐる。變な感じがするけれど、かゝる類は凡て宗教觀念發展の初期に於て何處にも見らるゝ所である。唯アールヤ民族のみでない。アフリカ、アメリカ、さてはアウストラリヤに於て皆然り。唯、此等に於ては其豐富(ユタカサ)と明了(アキラカサ)とが韋陀の歌に比して劣つてゐる丈けの事だ。

リグの中にある歌が何れも同一樣の古さのものでないとは私が屢々唱へた所である。併し其爲めに私は、私の古代梵語文學史中に主張して置いた說を改めやうとはしない、彼の書では、私はリグ讃誦の編輯は Brahmana(ブラーマナ)期の始まる前に完了してゐたものと見做さなければならぬと云ふた。其說に弱點があるとは今でも思つてゐない。勿論此種の研究には先入見を抱いてかゝるのはよくない。けれども後代のエーダ文並に其他の古文字の書の中のものとも比較參照せんければならぬ。所がそうして見ると、私にはどうしても、リグ中の言々句々何れも盡く同一の古さのものだと思へないのである。今其例證として、玆に最終の Mandala(マンダラ)からの拔萃を御覽に入れる事にする。之は近代的沈澱物だと一般に見做されてゐるものである。但し、果して然るや否や確定的證據がある譯ではない。

序でに注意して置くが、此次の歌の中に Visvakarman（ヰスヴカルマン）と云ふ神の名が出てゐる。此事から推定すると、此詩の作者は韋陀教の第一期に屬してるものでない。此名が固有名詞で使はれてゐるのは第十のマンダラの中にあるばかりだ。此語は元とは「萬物の作者」の義で、種々の古の神の敬稱に用ゐてある。インドラも Surya（スリヤ）も皆此名を附けられてゐる。又、Visvakrit（ヰスヴクリト）（萬物を作る彼れ）はアグニ神の敬稱にしてある。而して其アグニはブラーマナの書中ではヰスヴカルマンと同一のものとしてある。ヰスヴカルマンは甚抽象的な一個獨立の神で、Prajapati（プラジヤパチ）等と同じく「宇宙の創造者」、尚正しく云へば、「宇宙の修飾者、建造者」である。彼に献げたる讃歌を讀むと、其觀念の出て來た素地がほのかに窺はれる。其詩の作者の積では、ヰヴカルマンを單に創作者と見て居るやうだけれど、アグニや又はスリヤの痕跡を想起せしむる點がある。或詩に

「凡ての世界を犧牲として献げ、我等の父として降り來りたる預言者且僧なる彼は、最初に現はれて、富と幸とを願ひ、可死者の中間入りをなせり」

と、あるが、之の句には種々の解釋が付けられる、意味甚不明である。併し此に萬物の作者としてある所のヰスヴカルマンは元は火の神、特に朝の光の神であつた事を考へ合はすと、此文稍合點のゆく所がある。朝の神（Aushasya）（アウシヤスヤ）としてのアグニは、美なる世界を點出して夫れを朝時の供犧とする僧、とせられてゐる場合が屢々ある。而してかゝる供犧は一日及一年の始、又は世界の太初に行はれるものとしてある。詩人は、朝日の光をば毎朝竈で焚く眞の火の如くに世界を輝かすもの、と見たのであらう。或は詩人は昇る旭の光には、世界を持ち出し、見せしめ、存ぜしむる、即ち世界を作るの力が存じて居るとでも考へたのであらう。こんな

考は餘程變テコな思想である。變テコではあれど、尙考へ得べき思想である。韋陀の文を解するに當りては何時でも、少くとも考へ得べき或者に到着せいでは落ちつかないのである。

此詩人がギスヴカルマンを人間中へ降りて來た父と見做したのは、火のアグニ神を思ひ及んだのであらう。朝の光は、最初には、遠くに隔つてゐる神物と見えるけれど、後になると、人間の住んでゐる地上へ來て、其處(各家の竈)に住居して居る、其趣が他の諸神力とは異なつて居る。かの思想の萌芽は此處にあるのだ。アグニは人間と共に住する最初の神である事、彼れの存在は一切人間の活動、殊に工藝に必須條件なること、彼の惠によりてのみ人間は健康と富とを得ること、なんどの思想は種々の方法で韋陀の歌に言表はされてゐる。

此等の思想をギスヴカルマンへ移して考へて見ると、第一句は稍理解されるやうである。從來の諸譯では思想の連絡が認められない。

一、一切を見るギスヴカルマン(萬物の作者)が地を作り、其力により て天を示しし場所は何處なりしか、其支へは何なりしか、そは何處なりしか。

二、到る處に眼を有ち、到る所に口と腕と足とをもてる神なる彼。彼は天と地とを作り腕と翼とにて、之等を合せ煉るなり。

三、彼等は天と地とを何れの森、何れの木より、切出したるか。汝等賢者よ、彼れが世界を支へつゝ立てる場所を汝等の心の中に求めよ。

四、犧牲に悦べる、オゝギスヴカルマンよ。汝の最高の住所は何なるか、最低のは何なるか、はた此等の中間の住所は何なるかを汝の友に教へよ。汝自らの爲めに供犧せよ、汝の身躰(カラダ)を增加(フヤ)して。×

五、供物によりて生長する萬物の作者よ、汝自身の爲めに、地の爲め

に、天の爲めに供犧せよ。他人を暗黒の中に彷徨はしめよ、されど我等の中にては賢者を有力ならしめよ。

六、今日は、我等をして、戰時の保護を乞はしめよ。言語の主よ、ボスヴカルマンよ、我等の心に感應する萬物の作者よ、願くは彼は凡て我等の供物を受けんことを。何人にも祝福となり、又我等の安寧の爲めに善行をなす彼。

×此語元來アグニに宛てゝ云へるなり。火を供犧の主體とすると同時に又其對象と見るは波羅門には通例(アリフレ)の思想なり。火は供物を抱くが故に一種の僧なりとせらる。又之を神の處に運び行くが故に人、神間の媒者なりとせらる。されど火は夫自身神聖なる者にして尊き神なり。かくて火は供犧の主體たると同時に對象となれりしなり。卽ちアグニは自ら供犧を行ひ、自らに之を獻げ、又自らを犧牲として獻ぐとの思想成立ちしなり。是れこそは後代の語譚(ニルクタ)Nirukta



一四二頁(Roht 氏の譯を見よ)に見ゆる思想の本地なるなれ。卽ち先づアグニをば昇る太陽及朝と見、次に、日出を自然界に於ける一大供犧、天地の光榮の爲に點ずる所の光と見、最後に、此毎日の供犧は創造の爲めの供犧にして創造者の光榮を表する所以なりとする神統記(テカニヒオル)的思想を打成せしなり。

次には Zendvesta(ゼンドエスタ) からの抜萃です。

此書は文字の風が餘程古いもので、彼の Cyrus(キルス) Darius(ダリウス) Xerxes(ゼルクセス) 諸帝の遺した楔形字の刻文よりもまだ古い。此等の諸帝は何れも Aburó(アフロー) Mazdáo(マズダオ) (Auramzda(アウラマズダ) の Zend 語)神の惠によりて位に卽いたので、其神像を Behistun(ビヒスツン) に建立した人々である。さて此典籍、と云はんよりは寧ろ斷片はボンベイ在住の波斯遺民が今日でも遵奉し居る所の御經である。

第一番目の抜萃は Yacna(ヤシュナ) の第十三章中から取つたのである。此れの翻譯、寧ろ解字(デサイファーメント)は種々の人の手で試みられて居る。が先づ其中で著

しいのは Spiegel（スピーゲル）氏のと Haug 氏のとである、（ハウグ氏、波斯聖語論 'Essays on the Sacred Langage of the Parsees'）

本文に取掛る前にブンゼン氏著「史上の神」(God in History) の一節を參考の爲め掲げます。Miss.（ミス） Winkworth（ヒンクチース）の英譯に據る）

「先づ次のやうな畫を心に描きなさい。處は中央亞細亞古代の不思議の市都（ミヤコ）—— Bactria 府（宏麗の義）卽ち現今の BalkhB（バクトリヤ）市（諸市の母の義）の近傍に火を神として祭つてある所の聖山がある。その山の頂きから望むと、海拔約二千尺の高原が北方に行くに從ふて次第に低下して茫々たる沙漠で終つて居る、—— Bactrus（バクトルス）河は此沙漠に障げられて Oxus（オクスス）河と合し得ないのだ。次に南方には遙あなたに、Hindukush（ヒンヅターシユ）山（亞歷山の史家が所謂「Indian（インヂヤン） Caucacus（カンカクス）」の聳立すること五千尺。此國の大河バクトルス或は Delias（デハス）は源を此等の山—— Paropamismus（パロパミスムス）山卽ちヒンヅターシユ山——に發し、市の附近に來りて無數に分岐し、其地爲に灌漑を受けて潤濕、花充ち果溢るの美觀を呈して居る。所謂隊商（カラヴン）(Caravan) 共は山を超へて不思議の國に渡り行き、彼處より珍寶を持來りては皆此地に集まつて來る。……此處に或日の事人々が聖火を焚いて占卜をしやうとして居る。處へ指して、Zarathustra（ザラツストラ）と云ふ人が國の貴族共を叫合して一大宗教的活動をなそうと云ふので、自分の弟子や豫言者や說教師共を數多率ひて此處へ到着した、先づ、諸王子を招ぎ寄せて、正信と迷信と何れか其一つを撰ばしめようとする。其時の演說である、左の拔萃は。是は歌誦の躰になつて居る。拙譯は主にスピーゲル氏のとハウグ氏のとに據り、傍ら Hübshman（ヒユーブツシユマン）氏の訂正を參考した。（ゾロアスターの歌、Dr. H. Hübschman, 'Ein Zoroastrisches Lied.'）

一、全知なる主よ、今や我は、聞かんとて集まり來れる凡ての者に汝

の讃美と Vohumano（ヴフマノ）（善靈）の讃誦とを宣べんとす。

二、最も良き事を汝の耳もて聞き、清き事を汝の心もて見、以て各人自ら主義とする所を選べ、大審判の到らん前に、腎者は我等に味方せよかし。

三、双生（フタゴ）の老靈は想、言、行に於ける善事と惡事とを各自の動作を以て示せり。善き者等は二者を區別せりき、惡行者はせざりき。

四、此等二つの靈共に來りし時、生と死とを作れり。是れ惡しき者には終に最も憐れなる生あれ。されど善き者には幸（サチ）あれかしとてなり。

五、此等二つの靈の中の惡しき者は最惡の行を選べり。親切なる靈、動かすべからざる空（ソラ）を衣服とせる彼は正しきを選べり。而して善行によりて忠實にアフラマズダを喜ばす者等も亦。

六、デーヴを拜して欺かれたる者等は二者を正しく區別せざりき。最惡の靈を選みたる者等は集まりて共に議し、人生を惱まさん爲め Aehma（アヘーマ）に走り行けり。

七、而して、彼れ（善き者）に力は來れり、德は智と共に、而して長久なる Armati（アルマテ）彼女自ら彼れの身體（カラダ）を强ふせり。汝富むことあるは彼の女の賜によるなり。

八、さはれ、彼等の罪の罰來らん時、而してオヽマズダよ、僞（イツワリ）（Drŭj（ドルユウジ））を眞理（マコト）（Asha（アシャ））の手に渡しゝ者等に其敬虔の賞として汝の力の示されん時。

九、此時こそは、我等をば此世界の進捗者たらしめよ、オヽマズダよ、オヽ幸（サチ）を與ふるアシャよ。我等の心をして智惠の住へる處にあらしめよ。

十、其時こそは實(ダ)に、其處に邪なるドルウジは倒れ亡びなん、されど、
令譽を保ち續けたる者等はヲフマノとマズダとアシャの美しき
住所に長久(トコシエ)に集められん。

十一、オヽ人々よ、汝等若し惡者には責苦(セヅク)、善者には祝福たるべき、此
等のマズダの命令を固守せば此等によりて勝利獲られん。

次の三句はヤシユナの第四十三章より拔いたのである

「我は汝に請ふ、我に眞理(マコト)を告げよ、オヽアフラよ、太初よりして、清き
世界の父たるは誰ぞ。日と星とに道を作りたるは誰ぞ。誰か(汝を除
いては)月を增し又減ぜしむるを得ん。オヽマズダよ、是れ及其他の
事とを知らんことを我は願ふ」

「我汝に請ふ、我に眞理を告げよ。オヽアフラよ、誰か地と雲とを保ち
て落ざらしむる。誰か、風と雲とに速(ハヤ)さを與へたる。善靈の創作者は
誰ぞ」「我汝に請ふ、我に眞理を告げよ。オヽアフラよ、誰か地と雲とを保ち
と暗とを作りたる。誰かなつかしき光と夜とを作りたる。賢者に其義務を覺らしむる彼等なる乎。」

ゼンドアベスタを毫も誤なく譯出することは至難の業であるから、以上の譯文は必しも原意と精密に適合しとるとは保證は出來ないけれど、ゾロアスター聖典の要旨の存する所は、此世界には善と惡との戰爭が進行しつゝあつて、各人は其何れかに味方せんけれはならない、而して終りは善の勝利に歸する、と云ふにあること丈けは明白である。

次には佛典から拔かうと思ふのぢやが、さて何(ド)にしたがよからう、敎說物も比喩物も實にあり餘る程に澤山で、選り出すに困るが、兎にあれ、パーリ語で書いた釋迦の敎說集の中より左の如く摘出する。(The Dhammapada〔法句經〕東方聖典集第十卷)

一、凡て我等の現狀は我等の思ひ考へたる結果なり、卽ち我等の思考に根據し我等の思考より作らるゝなり。人若し惡しき思考を以て語り或は行はゞ、苦は、車輓く牛の足に其輪の從ふが如くに彼に從はむ。

四十二、蜜蜂は蜜を集め、而して其立去るや、其花の色をも香をも傷ふことなし。賢者の世に處する又此の如くなるべし。

六十二、愚者は「是の子等は我に屬し、此富は我に屬す」とやうの思考を以て惱まさる。我身、既に己れに屬せず、況んや子をや富をや。

一二一、一二二、「こは我に近づき來ることなからむ」と心の衷に言いて、惡を輕視するなかれ。「こは我に益なからむ」と心の瓶に云ひて、善を輕視する勿れ。水滴の落下、尙よく瓶を充たす。

一七三、善行を以て惡行を蔽ふ者の此世を照らすは猶月の雲を出づるが如し。

二二三、愛によつて怒に、善によつて惡に寬大によつて貪吝に、眞理によつて欺者に克てよ。[1]

二五二、他の誤りを見るは易く、己れの誤りを見るは難し。人其隣人の誤に於けるや糠を汰するが如く、其己れの誤を隱すや。騙者の其徒に惡骸子を隱すが如し。[2]

二六四、虛言する放逸なる者は剃髮によつて聖まらず。貪慾の虜、如何ぞ聖まるを得ん。

三九四、組める髮何の用ぞ、愚者よ、羊皮の衣何の用ぞ、內貪掠あり而かも汝其外を淸くす。[3]

1、羅馬書、十二ノ二十一、比照
2、馬太、七ノ三　同

3、路加　十一ノ三十九　同

佛基二教ほど、其主要な點に於て相反對して居るものはない。然るに佛教程基督教を想起せしむるものはない。佛教は高等力への依屬感情に少しも價値を置かないで其凡てを看過してゐる、從つて最高神の存在を否定して居る。基督教の根本義を云へば、父として神を信ずること、神の子として人の子を信ずる事及凡ての人間は彼の子を信ずるによつて神の子となるを信ずることに歸する。がく根本義に於ては相違あるに拘はらず、釋迦及其弟子、基督及其使徒等の言語には相一致してゐる所が、驚くべき程に存して居る。或は新約書中から佛典へ取り入れたのではあるまいかと疑はれる程だ、けれども、其類似せるもの丶多數は既に紀元前に存して居たものであることは明白であるから此疑は消える。



ピユルヌフ氏の佛教史緒論二〇五頁に左の如き譚がある、

「阿難、嘗て旅して田舍に到り、旃陀羅（チヤンダラ）族の一婦人 Mâtangî（マータンギー）（摩鄧女）といふ者と一つの井の傍にて遇ひ水を乞ふ。女已れが素性の賤しき者なるを告げ、近づくなかれと云ふ。阿難いふ、我が乞ふ所のものは汝の種族若しくは家族にあらず。只一杯の水を乞ふのみと、後に女は佛の弟子となれり」

新約書では、或教義が簡單な命令の形で表はされて居るのがあるが、それと同樣のものが、佛典の方では比喩の形で御談議體になつて居る。とやうな類が折々ある。

ソーマデーヴ四卷、二八ノ一に、

「或る僧、衆を集めて法を説く。聽者の中に王あり。王其嗣子なきを思ひ心快々として沈みし時、僧の云ふ、己れの富を捨つるは此世に於ける至

難の德行なるが如し。己れの富を捨つる人は己の生を捨つるに等し。生は富に固着せる如く見ゆればなり。然るに釋迦は慈悲の心に動かされて他者の爲めに其生を草の如く捨て玉へり。さらば我等如何ぞ此の憐れなる富に戀々たるべけんや。釋迦は此高德によりて一切の欲より離脫して聖智を得、終に佛陀覺者の位に達し玉ひしなり、故に賢者は凡ての樂より欲を離したる後は己が生を犧牲にして迄も、一切生類に善を行ふべし。かくてこそ眞智には達し得るなれ。聽けよ、昔し一切此世の欲を脫したる王子ありき。若く且つ美しかりしかど、遊仙の生活を志し、出行せりき。或日一商人の家に到りけるに其商人の妻、年若し。仙を見其眼の愛らしきに打たれ、曰ふ、君は今のやうなる辛き生をいかで志すに至り給ひたる。實に君が愛らしき眼もて詠められん其女こそ幸ならめと。仙之を聞き己が一眼を抉出して掌上に置き、女に謂つて曰ふ、母よ、之を見よ。汝若し好むとならば此醜き肉塊を取れ、他眼も亦此の如けん。我に告げよ、愛らしきもの何の處にかある」と。

かくて、說敎僧は之と同樣の比喩を數々擧げ來り、さて終りにいふやう、「眞の賢聖は富も生も願ることあるべからず又妻子にも執着すべからず、是等は棄らるべき草に等しければなり」と。

之を讀むならば誰が、聖書中の諸句を想起せずに居られやうぞ。馬太傳五ノ二九には曰、汝の右眼汝を叱らば之を抉出し去れ[×]と同十九ノ二九には曰く家若しくば兄弟若しくば姉妹若しくば父若しくば母若しくば妻、若しくば子、若しくば田を棄つるものは云々と。而して又路加傳十二ノ二八には曰く、今日は野にあり明日は爐に投げ入れられむ草と云々。

[×] Dialagi Creaturarum. p. D. 4. b に曰く～ Democritus（デモクリタス）は其兩眼を抉出せりき。其理由(一)冥想

の妨をなしゝ故(二)惡人の榮ゆるを見たる故(三)女を見れば必ず淫心を起すが故。

以上は類似の例の二三に過ぎない。

又同集「話の河の大海ニソーマデーワ著四卷二七」に次の話が載つてゐる。

「嘗て如來の宗教に志し、僧を恭敬せし一商人ありき。其子、父を賤んで罪人と呼べりしかば、父の曰く、何故汝は我を罵るぞ。子答ふ、汝エーダの法を捨てゝ、法ならぬ法に從へり。汝婆羅門を捨てゝ沙門を拜す。如來の宗教何の益かある。之に歸依するは、唯、賤しき生れの者、寺に隱家を求むる者、麻の衣を捨て髮を盡く剃る時幸なる者、欲しと思ふ物は何をも食ひ拂淸(ハライキヨメ)も懺悔も行はぬ輩あるのみ。と父の云ひけるは、宗教にも種々あり、或は他界を目的とするあり、或は衆生の爲めにと企つるあり。さはれ、眞のバラモン教と云ふは、禁欲忠實、一切衆生に對する親切、及妄りに性別の規則を破らぬ事等の外にありとしも覺えず。されば汝は一切生類の保護を唱ふる我宗教を罵ることあるべからず。何となれば、親切ならんとせば無法なるべからず、而して我は一切生類の保護以外に更に親切てふ事のあるを知らざればなり。夫れ我宗教は慈悲を目的とし解脫を極地とす、我若し之に固着すること過ぎたりとせんも我に於て何の罪かあらむ、子よ、と。

さるに、子は尙も罵りを止めざりければ父は彼を王の前につれゆきぬ。王は彼を刑すべしと命じぬ。但し死の用意の爲めにとて二ヶ月間の猶豫を與えられぬ。二ヶ月の終りにかの子は再び王の前に引き出されけるに、其面いたく痩せ衰へ色さへいと靑げなるを見て其故を問はれしに其答に曰く、我は死の日々に近づきくるを思ひ、食欲少しも起らずと。王告げて曰ふ、我が汝を刑せよと嚇(オド)しゝは、おゝよそ、生類が死の近く

時感ずる苦痛の如何にあるべきかを思ひ知らしめ、以て、一切衆生愛憐を命ずる宗教を尊敬するやうならしめんとてなりき。されど今は汝已に死の恐れを知りたり。是よりは更に進んで、精神の自由を得んことを勉め、再びと父の宗教を罵らぬやうにならざるべからず[×]と。子、心頗る動きつ。如何にせば精神的自由は得らるべきやと問ふ。王、時に、町に市の開かれあるを聞き彼に命じけるは、油の滿てる皿を手に支へ、町を通過し終る迄一滴だも飜(コボ)すことあるべからずと。執刑者二人刀を拔ゐて彼の後に從ひ、一滴の落ちん時立到(トコロ)に刎(ハ)ねんとす。子はやがて町の凡てを、一滴もこぼすことなく過ぎ終りて王に歸りける。王曰ふ、汝今日、町を過ぎ行く間、何物をか見しことありやや。答、我思ひは器の上に凝りて。我は更に其他の何者をも見ず又聞かざりき。其時、王の曰く、正にそれと同じやうに、最高の者の上に汝の想を凝すべし。思を凝らし而して、外側の生活に



心を煩はさざる者は眞理を見む。而して既に一度眞理を見たらん上は再び業(ゴウ)の網に捕はるゝことあるべからず。かくて、我は汝に精神的自由に達するの道を、言葉少なに教へ了はりぬ」と。

×Mahâvamsa. p. 33 (大史)比照(マハーヴァムサ)

釋迦によると、吾人一切の行爲の動機は慈悲(ヒダイ)即ち、吾人の所謂「憐人への愛」でなければならぬのである。然るに此高尚なる感情の事はバラモンの聖典中にも繰返し〳〵說いてある。Mahâbharata(マハーバラタ)の Udyogaparva(ウデョーガパルバ) 第三十八章に曰く、己れの欲せざる所は他になすべからず、こは簡單なる法則なり。自餘のものは盡く欲より起るなりと。同 Anusâsanaparva(アヌサーサナ) 第百四十五章に曰く、言想若しくは行を以て何者をも害はぬこと及慈悲憐愍なること、是れ善人の永久の法なりと。又同じく Śânti-parva(サーンチ) 第百六十章に曰く、寬容と忍耐、親切と平等、忠實と正直、肉欲及客氣の控制、溫和と

適宜と持重、寛大と沈靜、滿足と言語の親切と憎惡の缺脫——是等凡てを合すれば則ち是自制なりと。又同じくサーンチ、バルヲの第百十章に曰く何人にも恐れられず、又自ら何人をも恐れざる者、凡ての人を己れと同一視する者、かゝる人は凡ての困難に打克つと。又同じくアヌサーサナの第百四十四章に曰く常に友と敵とを同一樣の心を以て遇する者は凡てに友たるなり。かゝる人天に行かんと。

見るべし、吾人の最も尊んで價値ありとする所の者は上述の如く佛教にもある。バラモン教にもある。而して孔老二教の中にも存して居るのである。今其一二の言を引いて置く。

孔子曰く、汝の欲せざる所之を人に施すなかれ、と。

老子は曰く、有レ物混成、先二天地一而生……寂兮寥兮……獨立而不レ改……吾不レ知二其名一、字レ之曰レ道、强爲レ名レ之曰レ大曰レ逝、逝曰レ遠、遠曰レ反。

希臘や羅馬の作家は、其當時、如何はしき神話や偶像崇拜が行はれてゐたにも拘らず、宗教及道德的の高尙なる感情を發露して居る。其類の言句の如きは實に澤山あるから玆に揭ぐる遑がない。がプラトーは「人は神に似んと勉めざるべからず」と云つた。此所謂神とはジユピターや、マース Mars やマーキユリー Mercury などを指してるのとは思はれぬ。又或詩人は「良心は凡ての人に向つて神である」と云つた。彼は眞の神を知つてるのではあるまいか。

さて次に古代埃及の所謂「畫文字」の書類を見るに、何れも皆壯嚴（サブライム）な思想と稚氣を帶びた（どころでない、もつと下等な）思想との和物である。併し何處でも初期の宗教にありては、こんなのが通例である、怪むに足らぬ。宗教學者はそんな中から大切なものを選り出さねばならぬ。簡、眞美

なるものを東洋の聖典の中に見出すのはやさしい事。併しそんな實物丈けで滿足してはならぬ。薔薇や百合ばかりに眼をつけて、荊棘を看過する植物家は目出度い學者である。苟も自然的發達—草木のにせよ、思想のにせよ—なるものを研究しやうとする者はこんな態度を取つてはならぬ。餘事はさて置き、Turin と云ふ所にあつたバビルス製の書類の中に左の言がある(ルヌフ氏ヒッバート講義集二二一頁)

「全能の神、自己存在者、天地、水、生命の息、火、諸神、人間、動物、家畜、爬蟲、鳥、魚、王、人、を作りたる者……曰く我は天と地の作者なり。我は其山と、其上に居る被造とを揚ぐ。我は水を作り、而して Memura 川は成立す……我は天の作者にして又二重の地平線の秘密の作者なり。凡ての諸神に其內にある精靈を與へたる者は我なり。我、我眼を開く時其處に光あり。我眼を閉づる時其處に闇あり。我は時限を作り而して時限は成立す。我は朝の Chepra 午の Ra 夕の Tum なり」と又

「汝を祝福す、オヽ Ptah-tanu よ。自らの形を隱す大神よ。……汝は息める時警しめつゝあり。凡ての父の父凡ての諸神の父……永遠の無限なる時代を超ゆる警戒者、天は未だ造られざりき、地は造られざりき、水は流れざりき。汝は地を一所に集めたり、汝の手足を合せたり、汝の四肢を數へたり、汝の分れたりと見し物を其本位に直せり、オヽ神よ、世界の建造者よ、汝は父を有せず、自らの祝福によりて生れたるなり。汝は汝の眼の光によりて暗を逐ふ。汝は天の頂に登る。而して登り終りたる時にも下に來れり汝、冥界の住者なる時は汝の膝は地上にあり、而して汝の頭は上空にあり。汝は汝の作りたる物體を支ふ。汝の動くは汝自らの力によるなり。汝は汝自らの腕の力によりて揚げらる……汝の聲の轟は雲の中にあり。汝の息は山頂にあり。洪水の水は各地方の高樹を蔽ふ。……